

# 地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方

原 信 田 實

HARASHIDA Minoru

北 原 糸 子

KITAHARA Itoko

## はじめに

1世紀半前の都市、つまり、近代社会以前の都市の実像を知ることが困難なことはいままでもない。東京は、この間、急速な近代産業化、関東震災、戦災、さらには、戦災復興を経て高度成長期後の情報化社会へと突き進んだ。その今の東京から、単に、1世紀半前への逆戻りというだけではなく、この間の質的変貌を踏まえ、変化の実態に触れることができるのか、できるとすれば、その方法や手段はどのようなものか、本当のところは誰も自信はないだろう。

しかし、その困難な作業に、多少の希望を抱かせる絵画資料が残されているという。このことは、歴史の実像を捉えようとしている者にとっては、期待が持てる事態だ。

ここで問題なのは、文字資料ではなくて、非文字資料、つまり絵画資料ということだ。いうまでもなく、それは歌川広重の『名所江戸百景』（以下、『江戸百』）である。広重が現実になにを見、なにを伝えようとして描いたのか、そのことについては、本章以外の各章で原信田が説くところである。

## 絵画資料と文字資料

ここでのわたしの責務は、直接絵画資料を読み解くことではない。共同研究者として筆者に課せられた役割は、文字資料から江戸の復興過程を探り、『江戸百』の読み解きに寄与しようとするものである。絵画資料を読み解く補助資料として、文字資料のここでの有効性は、本論で実証されるはずのところだが、このCOEプログラムの課題である「人類文化研究における非文字資料の体系化」における本論の位置づけについて、まず、多少述べておく必要があるだろう。ここで非文字資料という場合、念頭に置くのは、すでに述べたように『江戸百』である。

では、なぜ、ここで取り上げる対象が広重の『江戸百』なのか。

「人類文化における非文字資料」プロジェクトにおいて、わたしたちは環境と景観の変化に関わる問題の資料化を目指している。具体的には災害による環境と景観の変化を問題として選択した。まず本年度の課題として、江戸時代の人気錦絵シリーズ『江戸百』を対象とし、その読み解きを行なう。理由はすでに触れられているように、このシリーズが安政2年10月2日（1855年11月11日）の安政江戸地震の翌年春2月から刊行され始めたということに関わる。江戸地震がそれまでの江戸の町並みをどれだけ破壊したか、その実相はつかめてはいない。しかし、マグニチュード6.9の直下地震で

ある。江戸の地盤の弱い地帯ではほとんど家屋が倒壊した。家屋倒壊、圧死、焼死で命を失った人の数は、大名屋敷 2000 人弱、旗本・御家人屋敷家屋倒壊 80%（死者数不明）、町方 4000 人余が、資料的に明確になっている数値である。恐らく、これに倍する人が亡くなったと考えてもよいだろう。となると、たかだか 4 カ月程度で、地震の爪痕が消え去るわけではない。その現実を前にして、『江戸百』をシリーズで刊行するとなれば、それまでの江戸の名所を描くわけにはいかない、また、描けないという事態であったと考えるのが自然であろう。

さて、ここで、「非文字資料」を文字通り、文字資料以外のあらゆるすべてという包括度の広い範囲を対象とすれば、果てしなく議論は広がる。ここでは、具体的に論ずる課題からは、人類文化における非文字資料全体を展望するような広範な論点を引き出すことはできない。また、現段階ではその用意もない。むしろ、非文字資料は、非文字資料として独立的に存在しうるかという論題に与する方向が予測される。近世の江戸に住む絵師、あるいはその周辺にいた人々は文字社会に深く関わっていた人々である。こうした環境で生み出され、増幅される絵画資料は、当然のことながら、文字文化を包み込んで成り立っていると考えないわけにはいかない。たとえば、一枚の錦絵の表題そのものも絵画が表象する世界の一部を担う存在である。この実際は、原信田の所論において論じられるはずだ。絵画を解釈しようとする場合には文字で伝えられる表題の持つ意味が重要であることはここでいうまでもないだろう。

もちろん、そうした文字を解さなくても、絵画は絵画として独立した領域を持ち、また、他の情報を借りなくても、観賞に堪えうる場合が多い。この領域を「芸術性」といった言葉で括り、「芸術」に閉じ込めてしまうことは簡単かもしれない。しかし、それでは、ここでの問題はなにも説いたことにはならない。ここでは、時代のなかに絵画を置くという作業のために、ひとまず、文字資料から読み取る情報を絵画に載せてみることを試みる。結論からいえば、情報を与えられた絵画は時代の言葉ともいうべき領域を獲得する。それは、その絵画が持つ意味を「芸術性」という普遍に委ねることはできないほどの時代の力を帯びた情報を発するはずである。言い換えれば、絵画資料は文字資料の補いを受けて、時代性を獲得するということができる。

本論は、「人類文化における非文字資料」についての全般的議論を行なうものではないが、非文字資料、ここでは具体的素材である錦絵が、補助資料としての文字資料を得ることで、新たな領域が広がることを論証する。そのことを通じて、当該時代における絵画資料と文字資料との関係性を具体的に提示したい。

## I 『名所江戸百景』の創造的読みへ向けて

歌川派の絵師、広重の最晩年の連作、『江戸百』は全 118 点の大作である。安政 3 年 2 月に板行が始まり、広重が死去する安政 5 年 9 月まで続いた。これまでこの連作は、何を描いているかが解読されてきた。しかし、どうして描かれたか、つまり作画動機に迫ろうとする解読の手法は採られてこなかった。そこでは、風景版画あるいは名所絵は、時代とは没交渉であると読まれてきた。別の言い方をすれば、それは「四季に彩られた江戸の名所を描いたものである」と説かれてきた。それは絵葉書のように、ある日ある場所の風景を切り取ったものだというのである。本稿では、この連作を安政と

いう時代から読み解く手法を提示する。と同時に、この作品が連作であるということを忘れず、1点1点を切り離して見ていくのではなく、ひとつの流れの中で読み解き、制作プロセスに迫る。

## 1——四季イデオロギー

「四季に彩られた」ということについて言えば、そのように読まれてきたのは、広重の死後出された目録の影響である。目録では、板行年代順ではなく、四季別に編集し直された。その結果、改印を手がかりにして確認しないかぎり、個々の絵がいつ制作されたかがすぐには特定することができなくなった。そののちの絵の解説は、その四季に基づいて行なわれることになる。その結果、四季による編集が、制作現場でなにが起きていたかへ向かう関心を封じたかっこうになった。

確かに、何の予備知識を持たずに絵に直面すれば、そこには四季に彩られた江戸の名所が目飛び込んでくる。色彩豊かに彩られていることから、それを見た現代人は、江戸の美しさに感激し、作られた美であることを忘れてしまう。しかし、後世の人間がそうした編集結果に依拠して絵を解説し、何の前提もなしに四季が描かれていると説くことは、四季イデオロギーと言われなければならない。

これから行なう探究は、改印を手がかりに、歴史的事実と照応させ、絵に描かれたものを確定するというものである。ここでは、歴史学を援用する。ある事柄を歴史の中に置き、その状況の中から解明しようという手法である。したがって、粉本探しではなく、史料探しになる。ここでは、『江戸百』という連作を、安政の地震後という時代状況に置いて検討する。そこから何が見えてくるか。描かれたもの、すなわち図像を論じるという意味で、この企ては、イメージ論<sup>(1)</sup>に他ならない。

## 2——時事絵あるいは時事錦絵の流れ

『江戸百』の読みで、もうひとつなぜか行なわれていないことがある。『江戸百』が生まれた安政にはすでに時事絵あるいは時事錦絵<sup>(2)</sup>の流れが形成されているにも関わらず、それとの関連で論じられることがなかった。ひとつには、時事絵あるいは時事錦絵が際物とされ、浮世絵の中でも審美的に低く見られていることが関係するだろう。もうひとつ、名所絵は、時代から超然としたものと見られてきたことがある。ところが幕末に目を転じると、1840～50年代にかけて、かわら版の出版が急増する。これらかわら版の購買層は、「近世的都市大衆<sup>(4)</sup>」であり、浮世絵の購買層でもあった。嘉永に入ると、新宿正受院の奪衣婆参拝がとつぜん流行し錦絵も多く出された。ペリーの黒船来航に際しては黒船絵と言われる絵だけでなく、来航をきっかけに国芳の「浮世又平名画奇特」も大いに売れ出すという現象も起きている<sup>(6)</sup>。八代目市川団十郎が32歳の若さで自殺するとその死絵が200種以上出回った<sup>(7)</sup>。こうして錦絵は、幕末の動乱期にかけて記録性、報道性をさらに強めていくが、これらの情報ニーズに積極的に応えていったのが、絵草紙問屋の「仮組」という新興勢力だったということも押さえておかなければならない重要な点である。

再興なった株仲間の新興勢力である「仮組」の絵双紙屋に、今田洋三は注目する<sup>(9)</sup>。

幕末のメディア動向に特色を与える存在は絵双紙屋であったといってよい。しかも実際には仲間に加わっていない小売絵双紙屋がいて、品川屋久助のような板摺職の者と結託して、災害報道の摺物や錦絵の販売に活躍していた。

『江戸百』をプロデュースする魚屋（坂名屋）栄吉は、地震の直前に仮組に加わり活動を始めてい

た。彼も、今田の言う「小売絵双紙屋」にはほかならないということは、三代豊国が、魚栄の店先を三枚続の大判錦絵にした「今様見立土農工商・商人」(絵1)<sup>(11)</sup>で明らかである。

今回の試みで論証しようとすることは3つある。

1. 幕末期、錦絵は話題性、報道性を強めていくが、『江戸百』は、こうした時事絵あるいは時事錦絵の流れの中で生まれ、地震後における江戸の名所の「今」を人々に伝えるシリーズとして始まった。市井の話題を名所絵の枠の中に封じ込めたという意味で言うなら、時事絵あるいは時事錦絵の影響を見逃すことはできない。本稿では、絵には出来事が隠されているとして、それを明らかにしていく。
2. 話題性、報道性を求める購買層に応じて絵を供給したのは、絵草紙問屋の仮組に編入される新興勢力であった。鯉絵の大ヒットを生み出したのも、無許可を承知で売れ行きを第一とする彼らであった。『江戸百』のプロデューサーである板元の魚屋栄吉は、地震直前にこうした絵草紙問屋の仮組に加入したひとりだった。
3. 板元の意欲に促されて広重は『江戸百』において変化した。還暦を迎えて広重は大胆になった。これまで描いたことのない名所を数多く選び名所絵のレパートリィを広げただけでなく今まで行なってきた意匠をここで多用した。関心の対象を遠景に、場所を指すものあるいは象徴するものを近景に配置した。このサインを読み解くことが『江戸百』の謎を読み解くことにほかならない。

### 3—「浅草金龍山」

この論証の過程で、従来の絵の解釈も読み直していくが、「(浮世絵を) 研究対象として見る場合は、改印にまず注意を払うことにしている」という吉田漱の言葉に従い、まず改印に注目した。その結果、「江戸の四季を描いた名所絵」という評価をくつがえす1枚を発見した。それは、このシリーズの中でも五指に入るほど評判の高い「浅草金龍山」(絵2)である。

江戸の町名主、斎藤月岑がまとめた『武江年表』(以下、『武江』)に次のような一行があった。<sup>(13)</sup>

「浅草寺五層塔婆の九輪、地震の時傾きたるを修理す」

これは安政3年5月の記事であるが、修復された五重塔を画面に描いた「浅草金龍山」には、その2カ月後の安政3年7月の改印が押されている。

ここに記されている「地震」とはなにか。『江戸百』板行の5カ月前に遡る。<sup>(14)</sup>

## II 安政江戸地震

—被害の実像を知るために

安政江戸地震は安政2年10月2日(1855年11月11日)夜四ツ時、すなわち、夜10時頃発生した。現在の計測機器がない時代の地震であるから、地点ごとの被害を現在の震度階に読み替え、震度分布図が作成されている。それによれば、江戸周辺の震度分布は図1「安政江戸地震の震度分布」のように、震度6以上の地域の分布は隅田川以東の本所、深川と、旧小石川沼を埋め立てたといわれる

神田周辺、日比谷の入江を埋め立てた大名小路周辺の地盤の弱いところに集中し、台地上の東京西部は至って少ない。火災の発生点を示す図2「安政江戸地震の火災延焼」によれば、ほとんど、震度6以上の地帯と重なり、地震発生と同時に起きた家屋倒壊で、火災が発生したものと推定される。微風であったため、関東震災の時のような延焼は免れた。

**大名屋敷の被害**は、江戸城下にある安政期の1万石以上の大名数は266家である。ただし、ここには1万石以上の石高を持つ御三家の家老などは除かれている。

このうち、死傷者数が確実なかたちで判明するのは、116藩の1860人である。この数値には、異論もあるが、そもそも不確定要素の強い数値であり、藩邸内での死者は藩士以外の雇人足や、国元からの農民などを含めると、さらに多数の死者が出ていたと考えられる。しかし、藩邸内で延焼など火災発生があった場合には、死者数は一挙に増えている。その例を挙げると、会津藩の139人、忍藩102人、鳥取藩79人、亀山藩65人、姫路藩58人、大和郡山藩58人、生見藩53人、佐倉藩41人などである。しかし、これらの死傷者は藩士だけではない。多くの農民も含まれていた。大名屋敷内での死傷者は、上・中・下、その他抱屋敷全体の死傷者をまとめて届け出たものが多く、どこで死傷したのか不明なものが大半である。江戸藩邸の死者は藩士あるいはその家族ばかりではなく、義務として江戸藩邸の雑役を担うために国許から来ている農民も少なくはなかったのである。また、江戸藩邸には江戸で雇われた多くの人足も居た。彼らの藩邸などでの居住条件を考えれば、当然圧死や焼死も想定されるが、その数は雇人足を紹介した口入と称される人足斡旋業者の管轄となるので、被災の実態は明らかにされていない。平常時でこの雇人足の数も藩邸収容人員の相当数を占めるから、被災者の数も少なくはないはずである。

もっとも問題となるのは、たとえ死傷者が把握できたとしても、常時各藩邸にどの程度の人々が生活していたのかが多くの場合わからないので、被害率を算定するための母数が把握できない。このことは大名屋敷に限らず、旗本・御家人、町人の場合も平常時の戸数や人数がわからないので、被害率を算出することはできない。そうした、限界を踏まえ作成した被害を受けた大名屋敷は図3「安政江戸地震の大名屋敷被害」のようになる<sup>(1)</sup>。

**旗本・御家人屋敷の被害**については、史料がないために、被害全体については、わからない。ただ、幕府の救済策から推定される建物倒壊率を通して、どの程度が被害を受けたのかを考える手段はある。

10月2日の地震発生後5日を経て、10月7日に至り、幕府は幕臣層の被害に鑑み、救済措置を決めた。

まず、万石以下から100石までの領地支配をする地方取・禄米取と、100石以下の御家人層に大別し、前者には無利息10年賦の拝借金を、後者には返済を要しない救済金を与えるというものであった。なお、被災対象は家屋の被害に対するものであって、人的被害は考慮されていない。被害は居宅類焼・全損・半損の3段階に分類され、当初は大破などは救済対象外であった。

支給予想額として、旗本500石以上について89177両余とされている。500石以下は被害額不明としている。ここに予想されている被災予想人員を実際の旗本数と照応させれば、幕府中枢部が幕臣層の被害をどの程度のものを見ていたかを知る手懸りとなる。安政地震当時の旗本数は不明なので、約半世紀前の寛政期の数値1674人によれば、500石以上の被害旗本を1658人と予想しているから、ほ

ほぼ100%の被災率を予想していたことになる。実際の被害数はどの程度であったのだろうか。先の救済金規定に基づく最終的な支給総額が、当時勘定吟味役であった村垣与三郎の日記から得られる。旗本層4488人、御家人層12966人が救済を受けたことなる。これを旗本・御家人総数に占める割合でみると、前者では被災率86.2%、後者では75.3%という数値が得られる。両者を平均すると80.8%となる。幕臣層の約8割が家屋に何らかの損害を蒙ったということになる。まことに甚大な被害であったことが推定できるのである。ここでは、500石以上の旗本層について、被害の甚大なケースのみを地図に示した(図4「安政江戸地震の旗本御家人屋敷被害」)。

町地の被害については、地震が発生してから2日を経過した4日に、町奉行所から各町の名主に倒壊建物、倒壊土蔵、死傷者数の調査が行なわれた。18世紀前半享保時代の町制改革によって分けられた23の番組ごとにまとめられた数値であるので、これを以って、江戸の町人地全体の被害分布を地図上で確かめようとする場合には不向きである。調査の主な目的は被災者に対する救済対象を把握することにあつた。当時の町人人口を54万人とすると、町人の死傷者は約1割強の7000人である。因みに、寺社奉行支配を含めた全人口は安政2年9月段階56万5千人、戸数は14万2千戸とされている。番組ごとの被害では、町人地の詳細な被害分布はわからない。ここでは、幸いに、「なるの後見草」<sup>(2)</sup>という随筆には町ごとの死者数が書き出されている。これを地図上に落としたものを示して置こう(図5「安政江戸地震で死者が出た町地」)。

以上、江戸府内の大名屋敷地、旗本御家人屋敷、町地のそれぞれ被害の内実の異なる図を重ねると、図6「安政江戸地震の被害図」が得られる。これによって、一応の被害分布を捉えることはできるだろう。<sup>(3)</sup>

### III 『江戸百』の誕生

#### 1— 解説のひな型

「安政江戸地震」で五重塔の九輪が曲ったことは、「浅草寺大塔解釈」(絵3)という摺り物が出るほどの事件だった。「江戸の情報屋」藤岡屋こと須藤吉蔵が記録した『藤岡屋日記』(以下、『藤岡屋』)をはじめ、さまざまな記録が残されている。<sup>(2)</sup>

人の耳目を集める場所、すなわち「名所」の五重塔が地震で被害に遭ったから事件だったのであり、その自慢の名所が復興したからこそ、江戸の人はおめでたく感じたのだろう。この出来事を『武江』に特記した月岑にとっても感慨深いものがあったにちがいない。というのも、地震の復興について月岑が『武江』に記しているのはこの出来事だけだからである。このおめでたい事件を江戸中の人に伝えたかったからこそ、市中の人に代わって、板元と広重は、修復後2か月という早さで、この事実を絵に仕上げたのである。7月という時期にもかかわらず、朱の雷門に対比するためには雪の白でなければならなかった。ここで季節は、後にも見るように、あくまで意匠にすぎないと考える。この点は、広重が写実的というより構成的であるかという議論にもつながる問題である。ちなみに、『武江』に修理のことを記した月岑は6月23日、浅草の奥山でお気に入りの活人形の見世物を見に行き、「塔の九りん曲り、直候を見たり」と日記に書きとめた。<sup>(4)</sup>

この「浅草金龍山」における解説の仕方が、本稿において繰り返し行なう解説のひな型である。す

なわち、ある出来事が起きた1, 2カ月後に絵師が、その場所の板下絵を描き、町名主から板行許可を表わす改印をもらったという点で、ある出来事と絵の間には照応性があり、絵にはその出来事がなんらかの形で描かれている、少なくとも描くきっかけになったと読み解く方法である。

個々の絵の解説に入る前に、『江戸百』という作品全体をみておく。総点数118点というのは、広重自身にとっても名所絵の連作においても最大規模である。この中には広重の死後板行された3点も含まれているが、2年半にわたり、これだけの点数を出せたのは、購買者の支持があったと考えてよいだろう。外題は、江戸名所ではなく名所江戸である。江戸名所の百景ではなく、名所である江戸の百景だということである。この倒置は、従来の江戸名所にこだわらないことを暗示している。地震後の景観の変化ということを考えに入れば、地震により一新された「名」所を描くという宣言にも受け取れる。『江戸百』が描いた場所の6割以上に地震の被害が報告されていることから分かるように(表1を参照)、町の景観は大きく変貌を遂げただろう。事実、横絵で描いていた従来の江戸名所絵ではなく<sup>(5)</sup> 縦絵の名所絵として試みている。では、名所とは何であるか。名所である百の景色とは何を表わすか。これこそ、『江戸百』の絵を買い求めた人間が見ようとしたものであるが、これについては追々明らかになっていくであろう。

板元の魚屋栄吉は、名所である百の景色を描こうという企画を立て、<sup>(6)</sup> 広重を指名した。広重は生涯1500点近い江戸の名所絵を描き、<sup>(7)</sup> 嘉永期にはその第一人者とされた。しかし安政2年9月に連作中の『六十余州名所図会』(以下、『六十余州』)の8点を制作してから、地震をはさむ安政3年2月まで制作を中断していて、『江戸百』の指名により制作再開の機会を得たのだった。広重にとって地震により中断された仕事を一日も早く再開したかったにちがいない。この時期、豊国や国芳のように、あるいは地震後の鯰絵でもうけた芳幾<sup>(8)</sup> といった同門の絵師のように<sup>(9)</sup> 広重にはヒット作がない。3月には、制作中の『六十余州』を完成するために最後の7点に専念して『江戸百』の絵を描いておらず、『江戸百』の仕事が急に決まった事情をうかがせる。『六十余州』完成後、還暦を迎えた広重は「薙髮の会」<sup>(10)</sup> を行なって人生に区切りをつけた。3月28日のことである。これもある意味で一新である。

## 2—最初の5点

『江戸百』は最初5点が板行された。改印は2月である。4カ所は、猫実(東)、内藤新宿(西)、洗足池(南)、千住(北)で、江戸の中心から東西南北に2里半前後、これまで名所として広重自身<sup>(11)</sup> が取り上げることのなかった場所であるだけでなく、名所とは必ずしも言い難い場所である。ヘンリー・スミスの言うように、この4カ所によって板元と広重は、取り上げるべき百景の範囲を確定した(表1を参照)。

範囲の確定としてこれら4つの地点が選出されたと考えるにしても、残りの1枚だけが、都市の中心の名所である説明がつかない。「芝うらの風景」(絵4)と題した絵は、その焦点の置き方がこれまでとは違っていて、<sup>(12)</sup> 將軍の別荘である浜御殿(現、浜離宮)が右下に描かれている。この絵は、2月の將軍のお成りをきっかけに描かれた。<sup>(13)</sup> ただし、江戸時代、江戸城をはじめ徳川將軍の施設を描くことは禁止されていたから、場所を外題に明示できない。芝浦という名所の風景と題するだけで何も明示しない描き方になったが、江戸の人間にとってはそれで十分だった。地震の混乱から立ち直ってくる江戸の姿を知りたいという情報ニーズを満たせばよかったからだ。

この外題の付け方と関心の対象の描き方は、先にみた「浅草金龍山」の場合とまったく同じである。浅草の絵でも関心の対象は遠景の五重塔であったが、そのことを明示していない。「芝うらの風景」では、漣を近景に大きく描いて芝の浦という何げない風景に仕上げながら、こっそりと地震後の江戸の「名」所の今を伝えている。風景という題材であれば、国芳らが行なっていた過激な「判じもの」より<sup>(14)</sup>穏当に、名所の今という情報を伝えられる。万が一、役人に咎められても外題から名所を描いたと言い逃れができる。<sup>(15)</sup>

この絵が重要であるのは、もうひとつ理由がある。これが最初の絵だと考えられるからである。5点のうちこの絵にだけ、彫師の彫千之助の名前が明示されている。彫千は、『六十余州』においても2点担当している。板元は、自身にとっても意欲作である、『江戸百』の巻頭を飾るにあたって、名のある彫師を起用したのである。<sup>(16)</sup>この絵を描いて、そして東西南北が確定されたと考えられる。

最初の5点の中には「玉川堤の花」(絵5)がある。この絵には「内藤新宿桜樹一件」という事件が隠されていた。<sup>(17)</sup>それは、地震で焼失し仮営業でしのぐ吉原に対抗して、内藤新宿を「名所」にして売り出そうという宿の人間たちの野望が引き起こした事件である。桜の木を「名」所の呼び物として客寄せを考え、玉川上水そのものを管轄する勘定奉行には根回しをして了解をとりつけた。しかし、上水端を管理する御林奉行への根回しを怠ったために奉行に事情聴取され、やがて場所の賑わいを視察に来た老中、阿部正弘に桜の木の撤去を命じられる。1月ばかりの桜の「新」名所は、こうして『江戸百』の中に残ることになった。<sup>(18)</sup>ここでは、関心の対象として、事件の主役になった桜の木が中心に描かれるとともに外題にも「花」とダメを押して、見る者の注意を喚起している。ただし、植えられた桜の木は老樹1本のみで、あとは苗木であったから、絵には誇張がある。

#### IV 地震から立ち直る江戸——復旧・復興の様子を知るために

広重の住む京橋狩野新道は、幸いに焼けなかったが、南伝馬町1, 2丁目は地震で倒れた建物からの出火で延焼し、周辺の町々を焼き尽くした。広重は恐らく延焼する町並みを目の当たりにしたと考えられる(図9参照)。さて、そうした町々がどのように立て直されていったのかを知る手がかりはそう簡単には見つからない。そこで、町奉行所に回される町触を含む当時の重要な行政書類あった「触留」(旧幕引継書)の安政3年(1856)、6年(1859)の記録から、地震の復旧、復興に関わるものを抜書きしてみることにした。残念ながら、地震発生後の安政2年の冊子は残されていないが、この3カ月間は、江戸町触などの資料から推して、町人の救済事業に没頭せざる得ない状況が続いたと推定され、インフラ整備は早くとも、安政3年以降と推定して差し支えないと判断される。

それらを抜書きすると、以下のようである。

##### 上水施設(神田上水, 玉川上水)

玉川上水は四谷大木戸水番屋から四谷大通に石樋を埋め込み、江戸市中へ給水した。この本管にあたる石樋が地震で歪み、水が漏れ、通り一面に溢れたことはさまざまな地震見聞記録に詳しい。しかし、ここだけではなく、市中の給水木樋、あるいは竹管などが強い揺れのため、はずれるなどして、地中に水が漏水した。この修復は、各木樋を一定の区間を区切って行なわれたため、工事期間中、上



水を利用する人々は水留め状態を耐えなければならなかった。

「触留」には、震災直後の修復記事を欠いているが、安政3年2月には、四谷本管石樋について、5日間を要する暫定的な水止めを行なった上で、江戸中心部の上水木樋から修復され始めている。安政3年以降の上水修復は、以下のようなものである。カッコで括った場所は修復が出来たことが記録上認められたものである。

#### 上水修復地域

- 安政3年 2月 四谷仲町（石樋本管暫定修復）  
3月 松村町（京橋）  
4月 南八丁堀，幸橋，外桜田，築地，四谷御門外，赤坂柳堤  
5月 木挽町5，6丁目  
6月 麴町紀伊屋敷樋，木挽町4丁目，**木挽町5，6丁目**  
7月 木挽町，赤坂柳堤，芝口，**外桜田**  
8月 虎門外，西久保，幸橋門外，四谷門外  
9月 赤坂柳堤，**虎御門外**  
10月 赤坂柳堤，浜町河岸久松町  
11月 四谷門外石樋（掛樋；水番屋から塩町3丁目）  
安政6年 3月 日比谷小路，四谷堀端石樋，麴町本丸掛樋，麴町吹上掛樋  
4月 神田上水浚い，神田橋門内神田上水樋  
5月 赤坂紀伊国坂石樋，四谷仲通石樋  
6月 木挽町6，7丁目，赤坂柳堤水番屋一葵坂間樋  
8月 **木挽町6，7丁目** **赤坂柳堤水番屋一葵坂間樋**  
9月 赤坂柳堤石樋  
10月 半蔵門外吹上掛樋  
11月 神田上水小伝馬町樋，神田上水水戸屋敷内樋，竹橋門外，赤坂柳堤水番屋一葵坂樋  
12月 外桜田西丸下，半蔵門内本丸掛樋・吹上掛樋，赤坂柳堤，四谷大木戸水番屋

以上によれば、神田上水の損傷は記録にはあまり認められないが、実際に損傷がなかったかどうか、この記録からはわからない。また、玉川上水の本管石樋の付替え工事となった四谷、また、赤坂溜池の柳堤通沿いの石樋修復は、区域を小区画に区切って進行させたため、6年の12月に漸く水番屋修復という最終段階に至ったことがわかる。修復工事中は1日程度の水留がしばしば行われていたから、生活上の不便は免れなかった。しかし、徐々に江戸城周辺の修復へと進み、町屋への水供給は安定していったと推定される。しかしなお、安政4年末段階でも、完全な修復がなされなかった。しかし、なお、6年まで修復を続行させねばならなかった樋榦箇所も少なくなかったことがわかる。

#### 各役所

幕府の主な役所の修復は、以下のように、順次進められた。四角で囲んだものは、修復完了の記録

が認められるものである。

安政2年10月	大番所
11月	勘定奉行役宅（小川町），勘定奉行役宅（虎門外），勘定奉行役宅（神田橋），本丸小普請持場
12月	牢屋敷，両国橋，火消屋敷（飯田町），畳蔵役所
安政3年1月	勘定奉行役宅（虎門外），火消屋敷（八重洲河岸），火消屋敷（御茶ノ水）廐（曲木）
2月	評定所，牢屋敷
3月	町会所，火消屋敷（麴町），火消屋敷（駿河台），火消屋敷（市谷）
4月	勘定奉行役宅（小川町）
5月	猿江材木蔵，火消屋敷（赤坂），廐（鶴見），船蔵・船見番所 <span style="border: 1px solid black;">評定所</span>
6月	浅草書替役所，浅草曆調所
8月	九段坂測量役所，火消屋敷（市谷），北町奉行所，勘定奉行役宅（小石川）
9月	お台場
10月	牢屋敷（風損被害取り繕い）
11月	勘定奉行役宅（神田橋；風損につき）
12月	勘定奉行役宅（虎門外；風損につき）
安政6年1月	金座吹所，大奥
2月	肴役所，青物役所
5月	勘定奉行役宅（虎門外）
6月	講武所（小川町）
7月	<span style="border: 1px solid black;">上野常憲院・有徳院御霊屋</span>
8月	<span style="border: 1px solid black;">お台場</span>
10月	本丸修復（地震損ではなく，6年7月炎上の修復），南町奉行役宅
12月	<span style="border: 1px solid black;">勘定奉行役宅（虎門外）</span>

以上の役所は幕府の費用をもって修復した箇所であって、江戸市中全体の様子をここから推定することは困難だが、少なくとも、勘定奉行所、町会所、町奉行所など、江戸市中を掌る諸機関の修復状況は、江戸町方の生活回復の状態を知る上で、ひとつのマイルストーンにはなるであろう。ただし、6年にいたると、後に触れるような、3年8月の大風を伴った台風被害の修復、あるいは、6年7月の炎上した本丸の修復など、直接地震による被害とはいえないものの普請が行なわれている。

### 見附門・橋の修復

諸見附門・橋の修復は、以下のように進められた。「柳営日次記」（国立公文書館蔵）によると、江戸城、および將軍廟の復旧工事の幕閣責任者が指名された。まず、安政2年（1855）12月9日に、修復御用掛として、老中首座堀田備中守正睦と若年寄本多越中守忠徳に命じられた。城内外と上野東

照宮、御霊屋を含め全体の統括の役目が与えられた。次いで3日後の12月12日担当の各奉行が任命された。この段階で担当部署は、城内外と上野東照宮関係の二手に分割され、各々勘定奉行を筆頭に作事・普請関係の工事担当奉行職と監督官の目付が付された。次いで翌3年2月6日、つまり震災後4カ月後に漸く、直接工事を差配する下奉行が任命されたことになる。しかし、このことは実際の工事がすべて震災後4カ月を経て初めて着手されたということの意味しない。城内外の地震場所の応急措置に使用される材木揚場が震災後9日を経た10月11日に辰ノ口堀端に設けられている（「書上帳」旧幕引継書）。

次に、材木揚場使用、外堀々端への普請小屋設置に関する書留類から、震災復旧工事の過程を一覧しておこう。概ね諸門橋は作事奉行、諸門橋を除く内外郭のうち内郭は小普請奉行、外郭は普請奉行が受持った。必ずしも記録が整っているわけではないから、修復工事着手の記録はあっても、修復完了の記録を確認できない。普請奉行管轄の工事に際して、材料小屋の設置場所の了解などを求めるため、町奉行宛に出された記録では、修復工事開始は修復小屋の設置、材料置場の人間一人のみの通行あるいは馬駕籠通行止めの告知、そして工事終了に伴う修復小屋などの撤去の通告からなる文面のみである。四角の括弧内に示す箇所は、修築となり、通行可能になったことが確認できる門である。

ただし、これらすべての諸門が庶民に開放されていたわけではなく、外郭の一部の諸門は通行可能であったが、内郭へ通ずる諸門は大名、旗本それぞれの格式に応じた通用門が定められていた。

- 安政2年10月 四谷門
- 11月 大手門
- 安政3年2月 神田橋門、竹橋門、田安門
- 3月 馬場先門
- 4月 半蔵門
- 5月 神田橋門、日比谷門、山下門
- 6月 筋違橋門、赤坂門、日比谷門、山下門、半蔵門、四谷門、呉服橋門
- 7月 常盤橋門、四谷門（2度目修復）
- 8月 田安門
- 9月 市谷門、筋違橋門
- 10月 半蔵門外渡櫓、市谷門、竹橋門（2度目修復）
- 11月 数寄屋橋、馬場先門（2度目修復）、竹橋門
- 12月 半蔵門、赤坂門、清水門
- 安政6年3月 馬場先門橋
- 4月 馬場先門橋
- 5月 一ツ橋門橋
- 6月 一ツ橋門橋
- 9月 牛込門橋
- 10月 雉子門橋（通船可）

城内外の諸門・橋は、震災直後には、被害の大きかった四谷、正門としての格式維持から大手門のみに手を付けられただけであった。その他の諸門は、安政3年2月以降ということになる。では、それまでの間の工事はどうであったかといえ、先に江戸町触から類推した町方の震災後の状況から推して、町奉行を中心に、江戸町方の救済事業に追われていたと見て間違っていないようだ。それもやや落ち着きを見せた年明けを待って、懸案の見附門・橋の修復が始められたということになる。以上のように、普請奉行管轄の土手・石垣修復が着手され、ついで、1カ月遅れで作事奉行管轄の諸門橋の修復が始められた。これらの修復工事の大半は3年段階で着手されたとみてよいだろう。この年の12月には、修復工事に携わった老中、勘定奉行、町奉行をはじめとして、関連諸役へ褒詞、褒章が一斉に与えられている。幕府の認識では、3年を以って、震災関連の復旧工事は終了したということである。しかし、その後も続行しなければならない状態であったと推定される。というのは、すべてが、震災関連とは断定できないものの、6年後半にいたっても、諸門橋の修復が行なわれているからである。ただし、すでに触れたように、この間、3年8月25日に関東地域を直撃する大風雨による倒壊などもかなりの数にのぼっていることが明らかだからである。この大風雨の打撃は、復興途上の江戸の社会の気力と財力を削ぐ結果になった。

### ふたたび、台風災害の直撃

安政2年冬大地震に襲われた江戸は、1年も経たないうちにふたたび大災害に見舞われた。安政3年8月末の台風である。この台風によって、地震後修復途中の家屋が再び大風で倒壊し、川からあふれた水による家屋浸水、高潮による海岸近辺の浸水など、震災の被害からの立ち直りを著しく停滞させる結果になった。

当然のことながら、地震被害と台風被害の地帯は異なる。江戸府内のそれぞれの被害分布を、参考のため示しておく。当時の人々は、大地震による大きな被害から立ち直らないうちにふたたび大風雨に見舞われたので、これらの災害を連続した災害と受け止めていた。ここに示した台風災害図は、「安政度地震大風之記」（東京大学付属総合図書館）と題する資料に基づいて作成したものである（図7「江戸における安政3年8月の台風被害」）。

台風は北西台地上の内藤新宿辺などに至るまで南からの強い風雨で襲い、また、江戸東南部の築地、浜町、芝、高輪の東京湾沿岸地帯で4、5尺（1.2 m～1.5 m）の床上浸水をもたらすなど、二つの災害をもたらした被害の様相はくっきりと違っていた。もちろん、地震でひどい被害を受け、またふたたび台風で、屋根や瓦が飛ばされ、人も亡くなるといった二重の被害を受けた地域も少なくない。要するに、これら連続した災害で、江戸は全域的に大きな被害を蒙ったということになる。台風被害での町屋の死者60人、怪我人90であった。建物などの被害数を町屋に限れば、潰家3006棟2956軒、これに半壊1304棟2145軒に留まった。総じて、震災での死亡者の多さに比べると、台風では、建物の受けた被害が大きく、相対的にみれば、地震の被害に比べて台風の被害は小規模に留まったとはいえる。

## V 絵の解説

### 1—お成りの場所を描く

これから個々の絵を時代状況の中で読み解いていく。

「王子瀧の川」「飛鳥山北の眺望」「日暮里諏訪の台」「千駄木団子坂花屋敷<sup>(1)</sup>」には、いずれも安政3年5月の改印がある。このつながりからは、広重らがお成りを名所選定の有力な情報源にしていることが浮かび上がってきた。安政3年3月13日に行なわれた板橋筋へのお成りと突き合わせると、つながりが見えてくる。將軍らは、平河口から出て九段、飯田町、神楽坂、早稲田を通り、雑司ヶ谷鬼子母神境内を通り抜けて、池袋の立場でキジ猟を行ない、板橋宿の乗蓮寺で昼食をとって、滝野川村から王子往還を通して飛鳥山を見ながら西ヶ原平塚明神前を過ぎ、道灌山より新堀村、千駄木植木屋の庭を通り抜け、ということは団子坂を上り、白山前町、小石川から水道橋を渡って、一ツ橋門から平河口へ戻っている。滝野川と飛鳥山と道灌山と千駄木という名所が選ばれているのが、お成りから2カ月後のことである。このうち、千駄木の花屋敷は誕生して4年ばかりの新しい名所である<sup>(2)</sup>。地震でも絵の中央に描かれている「茶亭」は崩れ落ちたが、「三階の家」は崩れなかったと、斎藤月岑は『武江地動之記』に詳しく書き留めていた。

「王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱」「高田姿見のはし梯の橋砂利場」「高田の馬場<sup>(3)</sup>」についても、お成りが名所選定の有力な情報源であることが分かる。安政4年1月21日の王子筋へのお成りでは、平河門から前回の帰り道を白山前町まで行き、今回は、駒込町通りへ進路をとり染井の花屋、西ヶ原の植木屋の庭を抜けて飛鳥山で上覧後、王子往還を通して王子の金輪寺で昼食をとっている。帰り道は滝野川村弁天境内を通り抜け雑司ヶ谷道をたどって面影橋を渡り高田馬場から早稲田、神楽坂と前回の逆の道筋で平河門に帰っている<sup>(4)</sup>。このお成りの月と翌月に面影橋と金輪寺と高田馬場が選ばれている。この事情から「王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱」(絵6)でも、絵師らの関心は遠景の金輪寺にあることが見えてくる。金輪寺は王子権現の別当である。

これら2度のお成りをきっかけに、合わせて7カ所が絵に選定されていることは注目に値する。板元らが、町触を重要な情報源にしていたことが示唆されるからである。と同時に、これらの通過ポイントから名所を選び出そうと考えた場合に、雑司ヶ谷鬼子母神を除けば水道橋小川町くらいしかないほど、このルートでの名所の選定は尽くされていると言ってもいい。

さらに、安政4年3月11日の亀有筋へのお成り<sup>(5)</sup>後の閏5月には「堀切の花菖蒲」、9月5日の中野筋へのお成り<sup>(6)</sup>後の11月には、「四ッ谷内藤新宿」、また、11月19日の亀有筋へのお成り<sup>(7)</sup>の翌月には「本母寺内川御前裁畑」の板行許可を申し出ている。ここでも、広重らはお成りのことなどおくびにも出さず、あくまでも名所絵として仕上げている。お成りの意図が市中視察かどうかは分からないが、行き帰りの道すがら自ずと町々の様子は目に飛び込んでくるので、遊覧とくに狩猟のためだけに限られたものではないと言うことはできよう。安政3年には1月の品川筋への鶴のお成りに始まり4月までに6回、7月と9月に各1回、安政4年には12回行なわれている。

## 2—復興後を描く

続いては、地震から復興する名所をとりあげる。「下谷広小路」(絵7)の改印は安政3年9月である。ここでの関心は、絵の右側に描かれた呉服店の伊藤松坂屋である。松坂屋は、地震で店も蔵も破損した上、火災で焼失した(図8)が建て直され、安政3年9月28日に営業再開にこぎつけた<sup>(9)</sup>。新築大売出しで配った引札は55000枚と言う。この大々的な広告が効を奏し、初日だけで1050両の売り上げを記録した。3日間の新築大売出しで3150両の売り上げだった<sup>(10)</sup>。松坂屋のほぼ目の前に位置する新黒門町に店を構える板元の魚栄はその営業再開を知り、広重に描かせた板下絵の出板願いをその月のうちに出し、許可された。

続いては、「増上寺塔赤羽根」(絵8)である。安政4年1月の改印がある。この構図は今までにないものである。これまで赤羽側から五重塔を描いたものはあっても五重塔から赤羽橋を描いたものはなかった。増上寺は徳川家の菩提寺で、二代秀忠をはじめ歴代の将軍の御霊屋がある。山門は、市中を眺める展望台としても有名で、その南端の丸山の一角には五重塔が聳えていた。江戸有数の塔は、家康の法号、安国院にちなみ、家康の像を祀る安国殿の蒼林の中にあった。続く外題の「赤羽根」は絵の左手に描かれた建物と塔を指している。これは九州久留米藩主、有馬中務大輔の屋敷で、とりわけ、もの見の塔は、江戸のランドマークとして有名だった<sup>(11)</sup>。

有馬家は、増上寺の警備も担当していたことから、地震で被害のあった増上寺の御霊屋の修理を、幕府から命じられていた<sup>(12)</sup>。安政3年の12月22日に、修復が完成し引き渡しが行なわれている。改印の1月ほど前である。しかし、「芝うらの風景」の絵でも述べたように、この時代、幕府の施設を直接描くことは禁止されていた。したがって、御霊屋が修復されても、これを直接描くことはできなかったし、事実、「仏所」である安国殿の中にまで立ち入れず、緑濃い鬱「蒼」とした林の上から顔を出している五重塔しか描きようがなかった。しかし、塔と赤羽の関係が分かれば、修復なった御霊屋のある増上寺の「大塔」を近景に、その修復を担当した有馬家を遠景に配置する必然性に納得させられる。ここでも関心の対象は遠景にある。

ある出来事と絵の執筆に照応性が認められるならば、『江戸百』中3本指に入るほどの傑作、「大はしあたけの夕立」(絵9)にも、出来事が隠されていると言える。改印のある安政4年9月の1月前に安宅の御船蔵が完全に修復されたとして完成の書付が提出されている<sup>(13)</sup>。遠景に驟雨に煙る安宅の御船蔵が描かれているが、これには異板がある。それには驟雨に浮かぶように御船蔵が描かれている。おそらく、これが最初の版、試し摺りと考えられる。「浅草金龍山」の場合のように、御船蔵の完成を祝う気持ちから最初その建物を浮かび上がらせたが、幕府の施設を目立たせるのはよくないという配慮が働いたためであろう、地名の安宅だけが外題に残された。建物は驟雨の中に隠され、外題で夕立としてダメ押ししている。ここでも絵師らの関心の中心は、遠景にあった。

広重は、復興なった芝居町も描いている。芝居町は吉原、魚河岸とともに江戸で日に1000両を稼ぐと言われる名高い場所のひとつである。芝居町は安政3年5月には復興していた。「猿わか町よるの景」(絵10)では、外題で、わざわざ「夜の景」だということわっているから、望月に照らされる夜の街と、影帽子を描いてみたかったことがわかる。影を描くというのは当時の絵としては新機軸と言える。改印は安政3年9月である。

絵では、右側にある天水桶の板に森田座の文字を書いて、座の名前が目につくようにしている。森

田座は、前年の安政2年12月に足掛け19年ぶりに座を再興させることができ、5月15日から新舞台として「いろはの書始四十七文字」を掛けた。<sup>(14)</sup> この芝居の一部が独立したのが、現在も時々上演される「松浦の太鼓」という忠臣蔵外伝である。国芳の判じ絵でも指摘したように、江戸時代、あからさまに赤穂浪士の芝居であると表現することは禁止されていた。そこで外題では、いろはに引っ掛けながら47の文字を用いて忠臣蔵であることを暗示している。この芝居は、赤穂浪士の本懐達成という単純な筋立てのお芝居だが、19年ぶりに果たした森田座の「本懐」を暗示するあたりは、心配りが行き届いている台本づくりと言える。<sup>(15)</sup>

ここでも月を季節の表象とは読まずに、第一義に、森田座の十五夜と考える。森田座の再出発は、上で見たように、5月の15日だった。旧暦の15日は満月である。広重は、名所以外の固有名詞を明示していない。あくまで名所絵を描くという禁欲的な姿勢を保っている。松坂屋が主たる関心だった絵でも外題は「下谷広小路」であり、後に見る山谷堀の絵でも関心の対象になっている料理屋の固有名詞は伏せてある。名所絵の領分を律儀と言えるほど守っている。

芝居町と並ぶ二大悪所、吉原の復興は、それから1年以上後のことである。6月25日から28日にかけて仮宅からの「引移り」があった。吉原は、地震後の火災で焼失し、深川などに散らばって仮営業をしていた。再建は思うようにいかず、当初500日とされた仮営業の期限は延長され、6月には地震発生時から数えても600日を超えていた。

引移り、今で言えば引越しは、仮営業の地である深川仲町、御船蔵前、安宅、御旅所、本所松井町などから、かごや船を仕立てて行なわれた。これを一目見ようと見物人でごった返した。<sup>(16)</sup> 27日の稲本屋の「引移り」は、豪勢で評判になったが、その翌日の久喜万字屋藤吉の「引移り」は、屋過ぎに船を仕立てて、大川橋、すなわち吾妻橋から船を上がり、馬道通りを経て吉原へ乗込んだものの夕方でよく見えなかったため不評だった。

引移りのために仕立てられた船は、屋形船4、5隻、屋根船多数とある。山谷堀から船で乗込んだものもあった。それから1月あまり後の「吾妻橋金竜山遠望」では、引移りで乗り込んだ屋根船を近景に、遠景に下船地点の吾妻橋を配した。「引移り」が作り出す華いだ気分を演出するには桜でなくてはならない。歌舞伎でも「義経千本桜」や「仮名手本忠臣蔵」の男女の「道行」で舞台を桜の花で飾り華やかさと色気を演出するが、この絵でも花びらを散らしたことで、その効果がいや増した。

この引移りに先立つ4月には、仮宅で「四人心中」事件が起きた。<sup>(17)</sup> 4月19日遊女2人となじみの客2人が、一間の二階座敷において「情死」した。「吉原始まって以来」の大事件について、広重らは、同じ月に「廓中東雲」(絵11)と題し『江戸百』にとりあげた。「暁八ツ時」とは午前2時から4時の時刻で、夜が白み始める時刻である。明け方の客との別れを惜しむ廓景色にして、この事件から得た着想を、しっとりと描いた。「きぬぎぬの別れ」とは、この暁の別れにほかならない。

広重は、また「浅草田圃西の町詣」(絵12)において、西の町の賑わいを、吉原の遊女の部屋からの眺めとして描いた。お酉さまの愛称で今日でも親しまれている鷲神社は吉原の裏手にあり、木戸の開放によってお酉さまの参詣人も遠回りせず吉原の中へ入れることから、紋日と言われる特別な営業日の中でも、とりわけ活況を呈した。この絵は、白い猫が印象的な絵で、ついそちらへ眼が行ってしまうが、ここでの関心も、遠景にある。すなわち、浅草田圃であり、西の町詣で、である。これは外題から分かる。今では東京の風物詩になっているこの行事も、広重が錦絵に描くのは、この時が初

めてである。広重は『絵本江戸土産』(以下、『土産』)第6篇で「酉の町」を初めて描いている。

### 3—祭と出開帳を描く

ここからは、地震後の都市の祭や出開帳を描いた絵を見ていくことにする。『江戸百』には、鳥追いと住吉踊りというストリートミュージシャン(「日本橋通一丁目略図」)や夜鷹と言われる街娼(「御麩河岸」)など、地震後に目につく風俗も描かれている。その鳥追いと旗本という階級の違う男女の悲恋を描いた「夢結ぶ蝶に鳥追」(通称「雪駄直し」)<sup>(18)</sup>という劇が安政3年に市村座上演されている。その中に後の黙阿弥、河竹新七は「何でもこの節は職人衆さ」というセリフを入れている。職人衆、すなわち大工、鳶、左官の三職は、鯉絵にも盛んに描かれたように、地震後の復興景気の恩恵を最も受けた社会集団だった。

「浅草川大川端宮戸川」(絵13)と題された安政4年7月の絵には、大山詣りに先立って行なわれる、水垢離でごった返す両国橋附近の様子が描かれている。この年は、『大山道中膝栗毛』<sup>(19)</sup>という戯作本が出るほど、とくに職人衆の間で流行った。大山は6月27日が山開きで、山へ詣でる人は、その前に、垢離場へ行って「さんげさんげ、六根罪障」などと唱えながら水をかぶって身体のケガレを清める。絵では、先導する山伏の姿も、町内に配って回る梵天も描かれている。<sup>(20)</sup>

この年、沸きに沸いた大山の参詣だったが、山じまいの翌日、境木でとんでもない事件が起きる。江戸のある武蔵の国と相模の国の国境にある馬立場の茶屋の前で、大山参り帰りの麴町の左官連中が、保土ヶ谷隣りの新町の間をからかったことが発端で、大勢の喧嘩に発展した。<sup>(21)</sup>地震後の復興景気で羽振りのよくなった三職(大工・鳶・左官)は、いつも以上の金を手にしていることから、大工ら職人が、頭に乗って人を殺しても金を出せば済むだろうと、たかをくくっていると、藤岡屋は書いて<sup>(22)</sup>いる。しかも、大勢で喧嘩になるので騒ぎが大きくなる特徴があるとも。仮宅をめぐるもめごとも多くなっていて、安政3年6月7日には町触も出ている。地震後4月までの7カ月間における喧嘩の件数は、264件、3760人に上っている。

事件から5カ月後の12月の「京橋竹河岸」には、京橋の上を歩く、大山参り帰りの姿が描かれている。決め手は、肩に担いでいる、みやげの手遊びの竹槍である。<sup>(23)</sup>大山帰りの職人の風俗を描いた、「山帰強気桔梗」<sup>(24)</sup>、通称「山帰り」という清元の舞踊でも、この竹槍が小道具に使われている。この事件が江戸の講の人たちに影響を及ぼしたのか、翌年の7月に大山詣りがシーズンに入っても、参詣する人が少なかった。<sup>(24)</sup>復興の建築ラッシュを象徴するように「大伝馬町こふく店」では、大丸を背景に上棟式の職人衆の一行も描かれている。

大山の山開きと前後して、同じ6月28日から7月1日にかけて、隅田川の河口にある佃島では、住吉神社の祭が<sup>(25)</sup>挙行されている。「佃しま住吉の祭」(絵14)において広重は、わざわざ外題に「祭」と書き神社の祭が主たる関心であることを明示した。広重は、これまでに4度住吉社を描いているが、祭をテーマにするのは初めてである。この絵も、広重らが『江戸百』において出来事を描こうとしていることが分かる1枚である。絵の中央に描かれた幟の「安政四年六月吉日」の文字を実際に幟に描かれているとして、幟が実在するごとき説を唱える人もある。しかし、中央の幟は祭の象徴と解釈すべきであろう。<sup>(26)</sup>ここでも、近景に場所の象徴である幟のアイコンを配置し、遠景に、関心の対象である祭のハイライト、水中渡御を描いていると読むべきである。記された日付は、幟に現実にもそ



記されていたというのではなく、祭が挙行された日付を遊びで書き入れたものである。幟にある整軒宮玄魚は、梅素（亭）玄魚の別号で、この幟の文字を篆書でしたためたためにそこに記されたのである。こうした遊びについては、『江戸百』に散見される<sup>(27)</sup>。

安政4年には出開帳も行なわれた。4月回向院の境内で、出開帳に伴って勸進相撲が催されて<sup>(28)</sup>いる。相撲興行を示す櫓太鼓のアイコンを近景に描いた「両ごく回向院元柳橋」には、その2月後の閏5月の改印がある。出開帳は、上総国芝山の観音寺の十一面観音や霊宝などであった。出迎えには、吉原十人講、相撲取、山伏といった異色の集団が加わっている。一行は千住の宿から下谷松坂屋で小休止し、御成街道をまっすぐに、筋違御門から須田町通り、駿河町の越後屋で（現、三越）昼食<sup>(29)</sup>をとり、魚河岸から大伝馬町へ出て大丸で小休止し、横山町の通りから両国の回向院へ入った。

出開帳を描いたもう一枚は、「金杉橋芝浦」（絵15）である。安政5年7月の改印がある。これは、従来お会式の絵と解釈されてきた。お会式は、日蓮が池上で亡くなった10月13日の夜に行なわれる、聖人に対して報恩感謝する会のことである。ここでも、改印が7月だという点が引っ掛かる。お会式に付き物の花万灯がなく、昼間だということも腑に落ちない。さらに、当時、いくら日蓮宗が江戸で盛んだといっても、お会式に群集が殺到して禁令が出たという記録を見たことがない。

絵を解く鍵は、まず、参詣した寺社に奉納する手拭い、「まねき」と、<sup>(30)</sup>羅傘とも呼ばれる衣傘のアイコンということになる。傘は、戸外においては天蓋の代用物で、これには人天蓋と仏天蓋とがある。ということは、傘の下には、上人か本尊がなくてはならない。もうひとつ、身延山の文字が見える「まねき」で隠されている金杉橋のこの辺は、身延横町と云われる一角である。毘沙門天で有名な正伝寺があり、出開帳の一行が立ち寄る場所としても有名な場所、つまり「名」所だった。

この年の7月9日、甲州小室の妙法寺から、日蓮大菩薩と七面大明神の霊物霊宝が江戸に到着している。迎えの講、つまり一緒にお経を読んだり、参詣に行ったりする団体のことだが、その講の人たちが「群集し、品川より大通り、日本橋、本石町通り、両国橋、豎川通り、二ツ目曲り、高橋より浄心寺へ」<sup>(31)</sup>入った。この記事を脇において絵をみると、南無妙法蓮華経というお題目の書かれた玄題旗で隠された辺りこそ、出開帳の会場である深川の浄心寺だということが分かる。現在でも、小室の妙法寺と深川の浄心寺の法縁は深く、一人の住職が両寺を兼務するほどだ。ここでも、遠景にある場所が関心の対象になっている。

絵は、出開帳の前景を煽ろうという講の人たちであふれ、出迎えの熱気に満ちている。前年7月の浄心寺での出開帳の際には、はでな迎え方をやってこれを禁じられている。「参詣群集し」<sup>(32)</sup>、太鼓を打ち題目を唱えて往来することがたえなかったほどの騒ぎだった。

開帳をきっかけとした絵はあと5点ある。ひとつは、2月28日から60日間開かれた目黒滝泉寺不動尊の開帳である。安政4年4月の「目黒新富士」では、それを遠景に描き、近景に富士塚を描く新機軸の名所絵に仕立てている。この月には指呼の距離にある「目黒元富士」も初めて採り上げ、「目黒爺々が茶屋」、「目黒太鼓橋夕日の岡」と精力的に目黒界限の名所絵を1月のうちに仕上げていく。

4月朔日からは深川永代寺で常州真壁郡大宝八幡宮の出開帳が始まり、広重は「深川八まん山ひらき」を描いた。改印は安政4年8月である。ここに描かれた庭園は「富が岡（深川八幡）の別当<sup>(33)</sup>の園」で、山開きとはその庭園の開園のことである。別当とは、神仏が習合していたこの時代、神社に設けられた神宮寺のことで、ここでは永代寺に他ならない。

広重らは、江戸の2つの大祭も取り上げている。地震の翌年の6月には山王祭が例年通り<sup>(34)</sup> 行なわれた。町方は地震による疲弊で休祭を申し出たが、幕府側は<sup>(34)</sup> 行なうを命じた。もうひとつの神田祭も描<sup>(35)</sup> いている。ここでも、ある出来事と絵の執筆に照応性が認められるならば、「水道橋駿河台」と「神田紺屋町」は閏5月と11月の改印からそれぞれ端午の節句と手拭のさらし干しが例年のように行なえるようになったことを伝える絵だと読めることになる。次に見る「市中繁栄七夕祭」も7月の改印から、そのように読める。

#### 4—『江戸百』7割達成

広重は、すでに見たように、嘉永2(1849)年以来、中橋狩野新道に屋敷を構え、住まいとして<sup>(36)</sup> いた。広重が火消同心として勤務した八代洲河岸の火消屋敷は、地震後の火災で焼失している(図9)が、そこから掘ひとつと、東海道をはさんだ広重自身のすまいのある一画は、不思議と焼け残った(図10)。広重のすまいの辺りも、図10から見ても分かるように、被害は相当大きかったと思われるが、絵の制作には支障なかったようだ。

安政4年7月の改印のある「市中繁栄七夕祭」(絵16)の絵を、広重の自宅からの眺めだと「読んだ」のは、ヘンリー・スミス<sup>(38)</sup> である。しかし、これだけではこの絵がなぜ「名」所絵なのかの説明にはならない。これまで見てきたように、広重はあくまで名所絵の領分を守って絵を描いているからである。また、この絵から具体的な場所を特定できないという説明も、この絵に描かれたアイコンを見落としている。嘉永5年の佐野喜版『不二三十六景』中の「大江戸市中七夕祭」には描かれていなかったもので、この『江戸百』の絵には描かれている重要なアイコンがある。

絵の下の方に四つの蔵が見える。これが「四方蔵」と称した南伝馬町三丁目の「名所」で、地震で潰れ焼失した様子を『安政見聞誌』(以下、『見聞誌』)が記している。南伝馬町三丁目は、当時の目抜き通りの中心部といった「名所」だった。『見聞誌』が被害を報じたのも、そうした場所だからである。この蔵を描くことで場所が特定され、「市中繁栄七夕祭」は、ただの七夕の絵ではなくなった。<sup>(40)</sup>

この絵を描いた時点での『江戸百』の制作点数は70点を超えていた。目標達成まであと3割残すほどになり、七夕を祝う余裕が画面の遊びに見てとれる。神田紺屋町の手拭のさらし干しのよう<sup>(39)</sup> に、江戸の町にも七夕が戻ってきたことを喜んでいるようだ。ここで、遠景に、自分が火消同心として14年ばかり勤めた八代洲河岸の火消屋敷の火の見櫓を配したように、安政3年5月の「外桜田弁慶堀糶町」でも、広重らの関心は、遠景にある、修復された麴町の火の見櫓<sup>(41)</sup> にあった。

ある出来事と絵の執筆に照応性が認められるならば、「上野清水堂不忍ノ池」にも上野の御霊屋の修復という出来事が隠されている。最後に、「両国花火」(絵17)を取り上げて締めくくる。改印は安政5年8月であるから、広重が死ぬ前の月である。本稿で何度か引用してきた広瀬六左衛門は『雑記抄』に「両国川開一世上困窮」として書き留めている。「当5月28日、両国川開は殊外群聚にて、此節世上の不景気に似ず、橋より下の方舟蔵の所まで見物納涼舟充滿すること、天保の頃に劣らず<sup>(43)</sup>」。嘉永以降、両国の花火は不定期にしか行なわれていないが、安政5年には行なわれたようだ。これが『江戸百』の最後の絵になったことを考えると、見る者にさまざまな想いを抱かせる1枚である。

ここまで、絵の改印を手がかりに、出来事と絵の執筆が照応していることを見てきた。このように、絵と、ある出来事を照応させていくと、あるつながりが見えてくる。それは、ある出来事からお

およそ1, 2カ月後に、その出来事が起きた場所を板元はとりあげ検印を求めているということである。これまで全体の4割近い絵で、このような照応性が確認されたからには、ある出来事から板元の指示があった、あるいは板元が筆を執ったと結論することは十分可能だろう。安政江戸地震という150年来の大地震であればこそ、平時と違って武家方も町方もさまざまな形で記録を残してくれたおかげで、後世の人間でも絵に隠れている出来事を明らかにすることができた。これは稀有な例である。ここから浮かび上がってくるのは、板元らがこの連作で、復興する江戸の町を追いかけ、その「今」を人々に伝えようとする姿勢である。これは、時事絵あるいは時事錦絵に通じる姿勢である。そうした絵に対しては人々の需要も強かったからこそ、この連作は100点を超えても出し続けられた。板元のねらい通り、出せば売れるシリーズだったのである。安政4年(絵1を参照)に描かれた魚栄の店の活気は、このことを雄弁に語っている<sup>(44)</sup>。

## VI イメージ論の可能性

ここまで行ってきたように、図像について論じることをイメージ論と言う。ここでは、『江戸百』の絵に即して、イメージ論が蔵している可能性をさらに探ることにする。

### 1—余興

先に取り上げた鯉絵の中に「地震で困ります しばらくのそと寝」(絵18)という1枚がある。地震で不安な一夜を戸外で過ごしたありさまを描いた絵だが<sup>(1)</sup>、この状況を文章で書き留めた人物がいた。浅草に住む戯作者の笠亭仙果である。地震から8日目の夜になってようやく家の中で寝ている。7日目の夜も近くの堀田原の馬場(現、台東区寿三丁目から蔵前三丁目)にたてた「かりや」には女を、男は小揚屋敷の外の「垣根」に「こよひも……寝よと人のいふにまかせ……例のぞこね」をして<sup>(2)</sup>いる。江戸中がすべてこんな状態だったとも付け加えている。

『江戸百』の中に板元らが地震を強く意識していたことを裏づける絵が2枚ある。「余興」の文字が外題に付されているのが、それである。1点は「築地門跡」であり、1点は「芝神明」である。改印はともに安政5年7月である。このときまでに、すでに予定の100点は超えているから、もはや余興と考えてそう記したと考えられなくもないが、そうだとしたら、その後続く作品に「余興」の文字がないことは説明に苦しむ。この2枚は、『江戸百』が安政江戸地震から復興する江戸の名所の今を伝えるシリーズであるという説を傍証するものなのである。

「鉄炮洲築地門跡」(絵19)において描かれた築地の本願寺は、当時も「築地門跡」とか「築地御坊」と呼ばれて江戸の人に親しまれていた。この伽藍は地震では潰れることはなかったが、8月の大風水によって建築物は倒壊した<sup>(3)</sup>。板元が絵に仕立てたのは、その翌々年の安政5年のことだが、安政江戸地震で倒壊したのではないから、これを描くのは余興ということになる。

続いて「芝神明増上寺」(絵20)という外題で描かれているのは、増上寺門前の光景である。芝神明辺りは東海道にほど近く田舎から江戸見物にやって来た一行、「お上り」をよく見かける場所であった。彼らは江戸地震という艱難辛苦を共有した江戸の人間ではないから、これを描くのは余興であると読める。ここに働いているのは、あの「しばらくのそと寝」やお救い小屋での炊き出しなどで経

験した運命共同体の感情である。このように余興と添えられたことを探っていくと、その根っこには地震を共に体験したという気持ちがあることが浮かび上がってくる。

## 2—想像力の飛翔

広重の想像力は、さらに飛翔する。「三間堂」という愛称で江戸の人間に親しまれた「深川三十三間堂」(絵 21) は地震で大破し、修復の開始は、この絵の改印の安政 4 年 8 月から、なんと 5 年以上も経った万延元年 11 月から、である。完了してもとの状態を取り戻すのは、さらに 2 年後の文久 2 年 7 月のことだった<sup>(4)</sup>。それまでの間は、堂守の報告にあるように、仮殿は、庭の空き地に建っていたのだろう。ということは、広重が『江戸百』のために三間堂の姿を描くには、自らの『絵本江戸土産』か場所の記憶に基づくよりほかなかったはずである。そこで、今では、本家の京都の三十三間堂にしか残っていない、名物行事の通し矢でもって場所の特徴を示しながら、三間堂の一部を描くしかなかったのだろう。

三間堂と並んで、江戸の人間に親しまれた、いわば江戸の「スパイラルホール」<sup>(5)</sup>も、「五百羅漢さざる堂」(改印は安政 4 年 8 月) に描かれたが、復活かなわず明治 7 年 8 月中に三匠堂も取りこわされ観音像を本堂へ安置していたが、大破してしまった<sup>(6)</sup>。

ここでの絵師にとって第一の関心事は、場所性、言い換えれば場所の特徴を描くことにあって、絵の中に描かれた対象を見た者が、姿形からいかにもその場所が描かれているイメージが湧くように描けていれば、十分だった。描かれた像と実景が必ずしも一致している必要はなかった。「三間堂」の姿を絵に認めた者にとって、現実の堂宇がどのような姿をしていようと、たとえば通し矢こそが、この場所を人々がイメージする恰好の素材であると、絵師らが信じていた。その意味で、場所に付着した「みんなの」幻想を絵に表出しようとしていると言えることができる。

## 3—「らしさ」の表現

広重は、『江戸百』の板行が始まった翌月の 3 月に還暦を迎え、剃髪式を行なった。人生に一区切りをつけた広重は、自らが作り上げてきた名所絵の殻を破って大胆な挑戦を行なうようになる。それが、近景に大きく、場所を表わす像を置くという、これまでにない技法だった。豎の画面もそうである。名所絵の総決算にしようというこの広重の全力投入を評して、板元たちは、広重の死後に出した目録に「一世一代」の文字を書き入れたのである。

したがって後世の人間にとって、近景と対比して描かれた遠景の図像の意味を読み解くことが、『江戸百』のなぞを解明することにほかならなかったし、当時の人間にとっても、これは密かな楽しみだったにちがいない。しかし、ここでは、むしろ、近景の図像に焦点を当てることにする。

画面の近景に大寫しの像を配置する手法は「近像型構図」などと言われてきたが、その像は、これまで四季を表わすものとして一義的に解釈されてきたと言ってもいい。この固定観念について、先に四季イデオロギーとしてえぐり出し、これらが第一義的に、場所を指すもの、あるいは場所を象徴するものと解釈してきた。と同時に、それを実像だとする解釈も、ところどころで退けてきた。

内藤新宿の桜同様、新名所の誕生を描いた「真乳山山谷堀夜景」(絵 22) を例に、場所を指示するものを、広重が巧みに使っていることを探ってみよう。

この絵の遠景として闇の中に描かれているのは、外題にあるように待乳山と山谷堀で、近景は、提灯に先導される芸者である。画面右側の灯りの漏れている店は、安政江戸地震で潰れた名高い会席、金波楼<sup>(7)</sup>（玉庄）<sup>(8)</sup>（図11）に代替わりして登場した有明楼<sup>(8)</sup>である。

芸者を近景に描き、広重は「堀の芸者」<sup>(9)</sup>として東都に名の高かった場所、つまり名所を表わした。「堀の芸者」という言い方で、人の口の端に上っていたのが事実とするならば、そのマスイメージ、つまり名所あるいは名物に対するみんなの想いに訴えて、広重が場所を描いたと読める。その「みんな」<sup>(10)</sup>とは、まずもって江戸の人たちである。これを、隅田川をはさんで「堀」の対岸にある向島の土手を実際に歩いている姿を描いたものだと読んでは、この連作での描画の特徴をつかみそこなう。『江戸百』の中にある「綾瀬川鐘か淵」の合歓の木も同様である。綾瀬川がその名所であることを指すものとして、広重は合歓の木を近景に配置しているのであって、隅田川のこちら側、すなわち汐入の辺りにも合歓の木が実際に生えていたと読むことは控えたい。

さきに取り上げた「浅草田圃西の町詣」の猫は、遊女のメタファーであって、遊女の飼い猫ではない。ここでも判じものである。雀形屏風、御事紙、「吉原雀」を散らした壁の腰紙という道具を配し、酉の市のおみやげの熊手のかんざし<sup>(12)</sup>でもって、お酉さまの日の吉原だとダメを押した。そうした絵柄、すなわちアイコンでもって、ここが吉原に他ならないことを示している。『江戸百』における広重が、写実的というより構成的である<sup>(13)</sup>と考えるのは、こうした点にある。

これまで見てきたように、「真乳山山谷堀夜景」では堀の芸者として名高い山谷堀のシンボルとしての芸者を、「佃しま住吉の祭」では祭のシンボルとして神社の幟を、「金杉橋芝浦」では日蓮宗のシンボルとして玄題旗を、「両ごく回向院元柳橋」では回向院の相撲興行のシンボルとして櫓を、「吾妻橋金竜山遠望」では吉原の引移りの船を表わすものとして屋根船を、「糞町一丁目山王祭ねり込」では糞町を指すものとして猿の山車を、それぞれ近景に配置し、場所の特徴を第一義に強調していると読んできた。この読みを拡張して、「浅草川首尾の松御廐河岸」では納涼の名所を表わすものとして屋根船を、「堀切花菖蒲」では園の呼び物を表わすものとして花菖蒲を、「亀戸梅屋舗」では梅屋舗を表わすものとして名木の臥竜梅を、「亀戸天神境内」では社のシンボルである名物の藤を、「上野山内月の松」では上野山内を表わすものとして名物松を、「真間の紅葉手古那社の継はし」ではその名所であることを表わす紅葉を、「深川万年橋」では亀売りのいる場所としても名をはせた場所であることを表わすものとして桶に吊るされたカメを、「日本橋江戸橋」では魚河岸を指すものとして半台の中の鯉を、それぞれ近景に配置して、場所を示すあるいは象徴するものと読むことが可能になる。さらに、これらの絵柄でもって季節を必ずしも表わしているわけではないと言うことが可能になる。「浅草金龍山」で見たように、改印とそれらの絵柄の間には時間的なズレがあるからで、なにかを秘めていると考えるからである。絵師らは、近景に場所のシンボルやインデックスを置き、観る者の眼を引きつけておきながら、関心はむしろ遠景に向かっていた。この遠景が何を意味しているかを解くことが、『江戸百』の謎を解くことになるのは、これまで例証してきたとおりである。

#### 4—「名所」の意味の変貌

広重が構成的であったとはいえ、国芳のような挑戦的な判じものにも、河鍋暁斎のような狂画にも、門下の広景のような戯画にも走らなかった。広重の作画姿勢がそうさせなかった。これは、年齢

的なものも影響しているだろう。広重は、『江戸百』において自分が築いてきた名所絵の枠を逸脱することなく絵を仕上げている。しかし、出来事を追うことで、町触や人の口の端に上る場所という意味での名所という意味合いが強くなっていった。これは、古くからある歌に詠まれる場所という意味の名所とも、名勝の地を意味する名所とも異なる意味を、「名所」という言葉に付与することになった。出来事で有名になった場所という意味は、明治維新以後の文明開化の中で誕生する名所を追いかけられる中で生まれてくる意味であった。したがって、従来の「なごころ」<sup>(14)</sup>の意味から『江戸百』の「名所」を解き明かそうとするこれまでの方法では、名所の意味をうまく解釈しきれぬものではなかった。これが、「四季に彩られた江戸の名所」と評する根本にある解釈の限界である。

## 5—方法的問題

本稿では、『江戸百』が、安政江戸地震後の江戸の名所の今を描いた連作だという着想を仮説として提出し、その検証を行ってきた。まず浅草雷門の絵に潜んでいた謎を、改印を手がかりに解き明かして仮説を発想した。この推論法は川喜田二郎によって「発想法」<sup>(15)</sup>と名づけられたもので、これを考案したのはプラグマティズムの創始者、チャールズ・サンダー・パース（1839-1914）<sup>(16)</sup>である。仮説検証の過程で、描かれたものを表象として扱ってきた。実像ではなく実像「らしい」ものとして、である。その描かれたものを、ある時代の「史料」として使うには、文字資料におけるテキストクリティック同様、イメージクリティックとでも言うべき操作が必要になってくる。描かれたものを、文字資料で、あるいはフィールドワークで、あるいは別の図像で批判的に吟味した上で「史料」として用いる必要がある。ここまで、40点を超える絵について新しい読み方を提示してきた。今回の共同研究では、『江戸百』の絵には出来事が隠されていると解釈し、文字資料で検討を加えていった結果、広重らが、ある出来事をきっかけに名所の選定を行なっていること、遠景には関心の対象を、近景には場所の特徴を表わす像を大きく置いて描くという手法を採っている傾向性があることを確認できるとともに、図像だけで解釈することの限界も明らかにできた。このように一定の実証成果をあげたように、ある図像をそれが生まれた時代の中に置き文字資料の助けを得て検討を加えるならば、浮世絵の解説に見られる思い込みやある種の解釈を避けることができるだろう。本文中で行なった例で言えば、出開帳の出迎えを祖師参りやお会式として読んだり深川の芸者が実際に向島の土手を歩いているなどといった解釈をしたりすることがなくなるだろう。あるいは築地本願寺のように、そこに描かれていたことをもって実際に伽藍が聳えていたという誤まった判断もしないですむだろう。と同時に、絵画資料は文字資料で補うことにより、時代性を獲得するということができたとすることは確かであると言える。ただ、我われは、自己の方法的視角と合わせて、「解釈」というプロセスについても意識的になる必要がある。要は、『江戸百』を総体としてどう読むかである。

## まとめ—景観論との関係において

さて、以上において、広重の『江戸百』を主として絵画論の立場から論じてきた。ここで、本プロジェクトにおける課題との関係について述べ、まとめにかえることにしたい。

このプロジェクトにおいて、私たちの所属班する第3班が課題とするのは、災害の痕跡と自然景観との関係性についてである。この課題の許に、広重の『江戸百』を採り上げたのは、安政江戸地震の

与えた痕跡がこの錦絵には色濃く反映されているからにはほかならない。しかし、それは、災害の「痕跡」がそのまま描かれているからという理由からではなかった。むしろ、そのこと自体がこれまでほとんど気づかれなかった。そのことは、今までの『江戸百』の解釈に如実に表わされている。

したがって、ここでのまず第一にしなければならなかったことは、安政江戸地震の「痕跡」は、この名所絵シリーズのなかに隠されているのかを発見することであった。そのことのために、必要とされたのは、江戸地震被災後の江戸市中で進行していたさまざまな事象の追跡である。この点については、ひとつの試みとして、まず、復興過程という課題を設け、その進行状況を資料から読み取り、それをバックデータとして、『江戸百』の一枚、一枚に込められた作者の意図を解釈する方法を採った。これらの作業を通して、『江戸百』において広重が試みた新しい構図、遠景と近景の分離がなぜここで確立されたのかが、明らかになった。それは、近景に周知の名所のシンボルを描き、絵を見るものに、「名所絵」の枠であることを認めさせ、そして、こころを和ませ、安心させながら、実は遠景に自らの真の意図を配するという新しい試みを確立したということである。このことは、ある意味で、現実と非現実、あるいは事象と心象との分離とも言い換えることができる。この名所絵シリーズには、震災後のリアルな現実が登場しない。したがって、景観が描かれているようでいて、そこに描かれているのは、必ずしも現実の景観ではなく、広重の心象風景であるということになる。

では、こうした発見は、災害痕跡と自然景観——あるいはここでは都市景観と言い換えることが正確だが——との関係性において、どういう意味になるのであろうか。ここで、一般論としての現実の景観と心象風景との関係性を論ずるのではなく、災害という現象、災害によって作者の日々馴染んだ日常が破壊され、無くなってしまったということを前提に問題を考えてみよう。そうだとすれば、そこに描かれた心象風景は、心象だからイコール非現実として切って捨てるのではなく、作者の心象的現実、つまり、今はもはや存在しない作者の心に残る風景が反映されていると考えることもできるだろう。実際そうした絵も描かれていた。

災害、江戸を破壊した災害について、絵師たちの残した消し去りがたい心象風景を、私たちは『江戸百』と向き合うことで、広重の心象風景のなかの災害痕跡に魅せられているということもできるのではないだろうか。しかし、これは広重の心象に限られることではない。当時の江戸の人々の共感が得られたからこそ、この名所絵のシリーズが百枚を超えて出し続けられたことも忘れてはならない。

付言：執筆分担は以下の通りである。

はじめに、II, IV (北原)

I, III, V, VI (原信田)

## 注

### I

(1) W. J. T. Mitchell, "Iconology", Chicago, 1986, p. 1において、イコノロジーは、アイコンあるいは、らしいもの、イメージのロゴスだと定義されている。したがって「イメージ学」、「イメージ論」と訳せる。この本は翻訳されているが、翻訳として難点があるため原著をあげた。

イメージという言葉は、描かれた絵柄と、それを見た人の脳に浮かぶ像を合わせた意味で、図像と心像と言い換えられるが、絵に描かれたものという場合にはアイコンとし、頭に浮かぶものを問題にするときにはイメージという表現を使う。ここで問題として浮上するのは、イメージと言っても、個人が抱くイメージと、みんな

- なが抱く共同のイメージがあるということである。もうひとつ、アイコンを四季に無前提に結びつけて解釈する傾きを、四季イデオロギーと名づけたが、イメージ論という視角を導入することにより、解釈者の中で行なっている、1つのアイコンと1つの観念の結びつけ方を吟味できる地平が開ける。
- (2) 吉田漱は「時局絵時事絵」を「記録的報道的意味で」ニュース性のあるもの、あるいは「その時期の報道あるいは諷刺の意味もこめて天災人災や時事的なものを含め」と定義している(『浮世絵の基礎知識』、雄山閣 1987年 p. 37)。吉田はまた「流行神やそれについての療法、まじない(略)伊勢神宮のおかげ参りという」現象もえがかれたと書き加えている。浮世絵の「ジャーナリズム化」を最初に指摘したのは、鈴木仁一である(「ジャーナリズム化せる末期浮世絵」『書物展望』1934年1月~3月号)。富沢達三は、「大事件・珍事奇談」を描いた錦絵について「時事錦絵」なる表現を提案している。(『錦絵のちから 時事錦絵とかわら版』文生書院 2004年 p. 2)
- (3) 北原糸子『近世災害情報論』塙書房 2003年 p. 126
- (4) 北原糸子「瓦版一消費される情報・蓄積される記憶」(宮田登他監修『鯰絵一震災と日本文化』里文出版 1996年) p. 65
- (5) 「広瀬六左衛門雑記抄」に「正受院脱衣婆」という記事がある。「正受院の脱衣婆像近年迄参詣群聚せり。此像其始は蛇が谷とて、四谷大木戸戸田安屋敷の困込に成りし処に捨て有りとぞ。其頃右の地は草木覆繁り、昼も陰鬱として寂しき谷なりし由。此辺夜行する、至って稀にて有し。若無扨子細有て夜行すれば、其谷に怪異なる声にて其人を呼ぶこと常也。或夜一人行かかりて、其人に逢て物語し、翌朝行て見るに、昨夜逢たる人にかはらぬ老婆の木像なり。この像の所為なるべしとて、其家に安鎮しけるが、靈驗不測を畏れ、在家に安鎮なりがたく、四谷長安寺へ移したるよし。其後は何なる所謂有しや、此寺に安鎮せしよし。右肖像裏に小野良実老母の肖像を模擬して作るよし。記しあるよし也。毎月六の縁日とて参詣人多くあり」(森銚三『斎藤月岑日記鈔』汲古書院 1983年 p. 249-250、『森銚三著作集続編』第3巻 1993年に収録)。森によればこの記事が掲載されている分冊は安政6年分である。そうだとすると記事中「近年」とあるも、流行は嘉永2年だから10年の開きがある。
- (6) 黒船来航を機に評判になり「8月1日ころより大売れに売れて、毎日1600枚あて摺るほどの売れ行きであった」。(南和男『幕末の江戸文化 浮世絵と風刺画』塙書房 1998年 p. 168)
- (7) 竜居松之助『江戸の巷談』(国史講習会 1917年 p. 138)
- (8) 南は、嘉永期の浮世絵27点を吟味し「浮世絵の絵そのものを楽しむのではなく、時事的なもの、風刺的なものなどの要素が加味されたことによって評判となり、非常な売れ行きとなったというものが17点(62.9%)あり(略)少なくとも天保前期の浮世絵とは異なった傾向が生じてい」と注意を促している(南前掲書 p. 175-176)。これには「地本草紙問屋のあくことのない利益追求のため、問屋側の手によって評判の浮世絵が作り出されていく現象が明瞭に認められる」として、「浮世絵は商品化され大衆化していた」(同書 p. 177)と結論づけている。
- (9) 今田洋三「幕末マスメディア事情」(前掲『鯰絵』所収) p. 80
- (10) 「諸問屋名前帳」(旧幕引継書)(国立国会図書館蔵)に「安政二年七月加入、上野新黒門町三吉店」とある。坂名屋とあるから、「魚屋」は「さかなや」と読んでいたことが分かった。
- (11) 画面から「浅草金龍山」と「玉川堤の花」が売れ筋商品であることがうかがえるが、興味深いことに浅草の絵は雪景色ではない。このことから、後に見るように広重があえて雪景色に仕立てて紅白のシンボリズムを強調したことを傍証できる。
- (12) 吉田漱『浮世絵の基礎知識』雄山閣 1987年 p. 29
- (13) 斎藤月岑『増訂武江年表2』(以下、『武江』)平凡社東洋文庫 1968年 p. 155
- (14) 地震およびその復興状況については、北原が後述するが、地震の被害に遭った、『江戸百』に描かれた「名所」については、『新収日本地震資料』(以下『新収』)や『藤岡屋日記』(以下、『藤岡屋』)第15巻にある「別本藤岡屋日記江戸大地震」を基に表1にまとめておいた。



## II

- (1) 江戸東京博物館『関東大震災と安政江戸地震』江戸東京博物館 2000 年.
- (2) 震災予防調査会『大日本地震史料』3 巻 明治 37 (1904) 年.
- (3) この項, 北原糸子『近世災害情報論』塙書房 2003 年による.

## III

- (1) 吉原健一郎『江戸の情報屋』NHK ブックス 1978 年.
- (2) 『安政見聞誌』には九輪が曲がった五重塔が描かれているし, 石黒直憲も『懐旧九十年』に当時の話を採録している.
- (3) 江戸自慢ということ言えば, 「水道の水で産湯をつかった」などという啖呵がある. (鹿島萬兵衛『江戸の夕栄』中公文庫 1977 年 p. 132)
- (4) 「斎藤月岑日記鈔」森前掲書 p. 67
- (5) 『六十余州』から豎絵を採用し始めているが, その板行は『江戸百』に先立つ 3 年前の嘉永 6 年 7 月に始まっている.
- (6) 高橋誠一郎は「魚栄が娘の関係から湯島の麟祥院内の裕福な僧侶が金主になっていた」と書いている(『浮世絵随想』中央公論美術出版 1966 年 p. 165) が, この情報源については確認できていない.
- (7) 広重に言及した同時代人の記述がある. 「広重」と題して「雑記帳」の中に書き留められていた. 「当時行るゝ浮世山水絵師は広重也. 広重は二十年来山水画計を出す. 其初東海道名所の画より都名所, 東都名所を出し, 夫より国の諸名所大かた書ざる所なし. 重宣と云は広重の弟子歟. 広重絵の一枚摺彩色魚貝絵あり. 全写真也. これは安政 3 年の記事であることが森銑三によって確認されている(前掲「広瀬六左衛門雑記抄」, 森前掲書 p. 136). 森の『古書新説』(七丈書院 1944 年 p. 372-378, 『森銑三著作集続編』第 8 巻 1993 年に収録)に「広瀬六左衛門とその掃墓記録」があるが, 六左衛門の素性は「下田奉行組與力」などを勤めたくらいしか分かっていない. 雑記, 日記とも戦災で焼失.
- (8) 芳幾の三枚続は 10 杯 (4 千組) 売れた. 北原糸子は, 「大地震焼失市中騒動図」がそれだと推測している. (北原糸子『地震の社会史』講談社学術文庫 2000 年 p. 153)
- (9) 「太く手っ取り早く金儲けをするには絵双紙問屋で当てるに限ると (当時の噂ばなしに) 言はれたそうだ」(内田實『広重』岩波書店 1978 年復刊 p. 65). 事実『江戸百』はヒットしたと言われている. しかし遺言書によると借金をしていたから生活は苦しかったはずである. 安政 4 年に筆を執った「武陽金沢八景夜景」「木曾路之山川」「阿波鳴門之風景」など今日評価の高い絵も, 当時は一向に売れず板元ももてあましていた(小島烏水『浮世絵と風景画』). 赤い色が使われていないため絵が引き立たないという. 広重の名所絵が 24 文場合によっては 16 文ほどに対して, 三代豊国の役者絵・美人画は 36 文, 三枚続は 100 文ほどであった(藤懸静也『浮世絵大家画集: 木版』浮世絵研究会 1915 年 p. 77). その豊国は弘化 2 年の東海道五十三次で俳優の似顔絵に見立てたのが受けて岡崎駅中村歌右衛門の見立て政右衛門は 7 千枚の大ヒットになり板元の伊勢兼は祝宴を開いた. よく売れたというのは 3, 4 千枚ほどだとある. (飯島虚心『歌川列伝』中公文庫 1993 年 p. 137)
- (10) 森銑三「一立斎広重の雑髪」『浮世絵芸術』昭和 9 (1934) 年 2 月号 p. 44. 森はこれに先立つ『本道楽』に連載した「斎藤月岑日記鈔」(八) (1933 年 11 月号) p. 3) でも取り上げている. 後年, 森は『斎藤月岑日記鈔』(p. 66) として出版した.
- (11) ヘンリー・スミス『広重名所江戸百景』岩波書店 1992 年, 「千住の大はし」の図版解説. 範囲確定後に, この範囲を超えた場所を描いているので, 厳密に言うとは正しくはないが, 百景を最初に構想した時点で, ひとまずこの範囲の中の「名所」を取り上げようと板元らが考えたと言える.
- (12) 広重がこれまで描いた「芝浦」の風景は, 9 回描いている. 中に, 浜御殿らしきものを描いている絵もあるが, 江戸湾を主に描いている. 『絵本江戸土産』(以下, 『土産』) は『江戸百』のモデルと考えるが, 広重はその第 2 篇 (嘉永 3 年刊) で「芝浦」の題で描いている. ここでは滯と海しか描いていないが, 二代広重が担

当した第9篇（元治元年刊）では、「芝浦御濱沖」として初代が『江戸百』で採った構図を再現している。『江戸百』板行当時、二代目は助手として初代の仕事ぶりを見ていたはずで、初代の「芝うらの風景」の意図を傍証する描き方と言える。なお、作画頻度の計算には、酒井雁高編『広重江戸風景版画大聚成』（小学館1996年）をデータベースとして利用した。

- (13) 『触留』25分冊の1（以後25-1とする）、2月2日「お供揃えにて、浜御庭へ道筋 内桜田門、松平下総守屋敷脇前、馬場先門前堀端、相模守屋敷脇、阿波守前数奇屋橋門外、元数奇屋町、尾張町、木挽町五丁目、奥平大膳太夫脇、浜大手門、還御同断」。『触留』の情報は北原が取捨選択し提供したものである。ただし安政4年と5年分が欠落しているため、藤岡屋で補った（『藤岡屋』第7巻三一書房1990年p.112）。『藤岡屋日記』の原本は東京都公文書館にあり、三一書房で活字化された。
- (14) 幕府に対する国芳の挑戦的態度については、高田衛「鯉絵の作者たち」（前掲『鯉絵』）
- (15) 武家と板元・絵師との情報をめぐる政治学については、たとえば、南和男前掲書68ページ以降を参照。あからさまな風刺画は取締りの対象となったが、風俗上好ましくない絵の場合も取締りの対象になっている。天保14年のことだが、「絵柄風俗不宜」として町奉行は絵師6人に請書を提出させているが、この中に広重も含まれていた。広重は、役者絵も名所絵に匹敵するほどの量を制作しているが、歌川派の総帥、豊国ほどの評判はとらなかったし、同じ歌川派でありながら、国芳のように、幕府の取締りに挑戦するような制作を続けたわけではない。この両雄の間であって、広重は、そのいずれにもなれない自らの活路を名所絵に見出したと言える。嘉永3年の「当代全盛江戸高名細見 浮世屋画工部」では、役者絵の豊国が第一で、第二が武者絵の国芳、三番目に名所絵の広重がランクされていた。
- (16) 『六十余州』では、6割以上に彫師、場合によっては摺師の名前まで摺られているが、『江戸百』では、彫千の名前が3度と彫竹が1度摺られているにすぎない。彫竹は、横川堂彫竹といい国芳と三代豊国の彫りを担当していた名のある彫師だった（前掲飯島書p.205）。彫千の名前は2月と4月の品川の2枚以後出てこない。板元の姿勢の違いか。
- (17) 「内藤新宿桜樹一件」『藤岡屋』第7巻p.111
- (18) 正確には、玉川堤を描いた絵がもう1枚ある。濃州屋のものだが、これも安政3年2月と『江戸百』のと同じ年月の改印なので、「初めて描いた」としても問題ない。

#### IV

この項、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『安政江戸地震』第2章「災害の社会像」（2004年3月発行予定）参照。

#### V

- (1) 『藤岡屋』第7巻p.152。『触留』25-2も。このお成りの順路の内、雑司が谷鬼子母神は選ばれていない。
- (2) 嘉永5年2月19日楠田宇平次という団子坂下に住む植木屋が庭開きを行なった（『藤岡屋』、『武江』）。2年後の嘉永7年に出た切絵図には紫泉亭とある。「四季花屋敷紫泉亭眺望よし」との書き入れもある。場所は、森鷗外記念館の崖上から崖下の文京区立第八中学校のあたりにかけてあったと推定される。宇平次は豪放な人物で、幕末前後のこととして負債総額が一千両になったことを記念して大祝宴を開いたとある。『今昔対照江戸百景』は、明治になって根津に遊廓ができると、その寮になったという地元の人の話を付け加えている。自らも新興勢力の魚栄は、こうした名所の新生に共感を寄せたのであろう。幕末の園芸ブームを演出した植木屋による谷中一带の菊見見物は、明治まで人気が続き人々に長く記憶されることになる。
- (3) 『藤岡屋』第7巻p.430-431
- (4) 『藤岡屋』第7巻p.431とp.433
- (5) 両国橋から船に乗り隅田村水神脇から上がり、綾瀬川、篠原村、下千葉村より亀有村へ向かい途中獵を行なっているが、堀切（村）は篠原村と下千葉村の中間に位置し、3年4月27日のお成りの際には特記されて

- いた。(『藤岡屋』第7巻 p.466)
- (6) 中野からの帰路、内藤新宿通り、大木戸、四ツ谷を経て田安門へ入っている。(『藤岡屋』第8巻 p.8)
- (7) 亀有村の恵明寺で昼食をとる行き帰りに、両国橋から隅田村水神脇まで船を使い、本母寺境内——御前裁場——大土手通りを通っている。(『藤岡屋』第8巻 p.71)
- (8) 矢田挿雲が『江戸から東京へ』に書きとめているエピソードがある。広重が(南)鞆町の髪結床へ入って自分の番を待っていると、先番の若い衆たちが広重の絵をしきりに褒めるのが耳に入ってきた。「えっ、おう、広重って奴はたまらねえな。今度出た内藤新宿の、馬の尻なんざあ巧えもんだな」と。これを聞いていた広重は、いたたまれず「また来るよ」と言い残して床屋を出てしまったという(中公文庫(三) p.89)。この絵がお成りをきっかけに描かれたとすると、広重の照れというよりも面倒になることを避けたように見えてくる。
- (9) 安政3年9月29日「下谷伊藤松坂屋次郎左衛門様(略)昨日より□□□(ムシ)御賑々鋪御見世開被為成候に付□(ムシ)格之通生鯛一折祝遣し申候」五島美術館蔵「永代記録帳」『新収』p.1320『新収』別巻も。広重は、かつて、30歳後半の時期に、松坂屋の広告絵を描いている。
- (10) 松坂屋秘書室提供の「上野店外郭見取り図」(円志図)により、従来の解説で「髪結床」とされていた建物は、番所であることが判明した。
- (11) 『江戸循覧記』は、名古屋でルポルタージュ作家として活躍した猿猴庵こと高力種信が、天明6(1786)年から寛政にかけて江戸に滞在した経験を文政11(1828)年に出版したもの。『江戸百』の28年前ということになる。『江戸循覧記』については、鈴木章生『江戸の名所と都市文化』(吉川弘文館、2001年) p.158以下を参照。今回は東洋文庫所蔵の画像を掲載できなかったが、とりあえず江戸東京博物館『大江戸八百八町』展の図録(2003年 p.151)で確認できる。
- (12) 「御動向記録」(『新収』補遺別巻 p.751)、「御霊屋御廟向其外御損所御修復」(柳營日次)『市史稿』p.98
- (13) 『市史稿』市街編第45 p.53,『藤岡屋』にも修復した小普請方への褒賞が記録されている。(第8巻 p.6)
- (14) 『藤岡屋』第7巻 p.222
- (15) 忠心蔵にまつわるこの美談は、竹内蓬廬の「俳家奇人譚」のフィクションである。
- (16) 『藤岡屋』第7巻 p.569
- (17) 『武江』,『藤岡屋』第7巻 p.501-502
- (18) 雪駄直しについては、三好一光編『江戸生業物価事典』(青蛙房1987年復刊) p.130
- (19) 『大山道中膝栗毛』(『武相膝栗毛』所収,神奈川県図書館協会1983年)
- (20) 『絵本江戸風俗往来』p.89。ただし明治期になると5月の行事になっている。
- (21) 『藤岡屋』第7巻 p.585-586「大山参り帰り麴町左官講中、東海道堺木建場ニ而、喧嘩一件」
- (22) 『藤岡屋』第7巻 p.225。6月7日の町触については p.233-234
- (23) 前掲『大山道中膝栗毛』,小松田良平「山帰り考」(『粋の世界—清元名曲考』勉誠社1986年)
- (24) 『武江』p.166
- (25) 住吉神社「御社用日記」
- (26) 2003年8月3日、陰祭に住吉社へ出向き、現存していないことを確認した。
- (27) 「金杉橋芝浦」の講の一行がかついでいるまねきや「深川木場」の傘に見られる「魚栄」がそうである。これらをもその場所に実在したと読んで絵師らの遊びを理解できない。
- (28) 『藤岡屋』第7巻 p.499
- (29) 『藤岡屋』第7巻 p.499
- (30) 「一寺の住職たる官僧は朱の折傘黒びろうど帛納を用ふ是私歎朱も赤傘とか云ふなるべし」『類聚近世風俗志 守貞漫稿』名著刊行会1979年 下巻 p.379
- (31) 『藤岡屋』第8巻 p.261
- (32) 『市史稿』市街編第45 p.146
- (33) 『土産』第2篇(『日本名所風俗図会』江戸の巻1角川書店1979年 p.224)

- (34) 『触留』25-2, 4月5日, 「山王祭礼神輿練り渡り条例の通り心得可申, 付祭内躍屋台, 地躍は郭内引き入れに不及」. 『藤岡屋』第7巻 p. 238 や『武江』も参照のこと. 絵にも今にも泣き出しそうな空模様が描かれている.
- (35) 安政4年9月の改印のある「神田明神曙之景」である. 神田祭は山王祭と隔年で行なわれているが, 安政4年は神田祭の年で, 9月15日に執行された祭礼に先駆けて出された町触では, 前年の山王祭とバランスをとるためか, 前年並みにするようにとの指示がある. (『藤岡屋』第7巻 p. 586)
- (36) 内田實『広重』p. 94-96. 「中橋狩野新道」という場所については, 狩野屋敷のところを中橋狩野新道ではないかという説もある. 実際, 地震の報告のなかでも, この説を採っているものがあるが, 狩野安信が寛永年中(1624-44)に幕府よりこの中橋に屋敷を拝領し, 中橋狩野の祖となった事実から考えて, 内田説を採用すべきであろう. 今ひとつの決め手は, 三村清之助の『江戸地名集覧』において, 「狩野新道」を「京橋中橋大鋸町南裏」としており, 内田が示した地図の場所と一致することである. このことは, 初代が死んで5年後の文久3年版の切絵図に, 大鋸町の狩野屋敷の隣に「画工広重」とあることから裏づけられる.
- (37) 図10の焼失図, 『新収』p. 255
- (38) 『広重名所江戸百景』の同図版解説.
- (39) 大久保純一「名所江戸百景考」『歴史民俗博物館研究紀要』2003年
- (40) この蔵が白く描かれていることについて, 見世蔵だとすると黒だから, このアイコンは「四方蔵」ではないという反論には, 後述する「らしさ」という観点から再反論する. 前出の「山王祭の練り込み」を描いた絵で, 山車の順序を間違えているだけでなく, 近景の諫鼓鳥を白色の羽根に仕上げている. 白色は神田明神のもので山王は赤でなくてはならない. これは配色を含めた構成の問題と考えるべきだろう. 「金杉橋芝浦」の羅傘にしても, 『守貞漫稿』が言うように「朱の折傘黒びろうど帑納を用ふ」だとしたら, これも描き違えている. 描かれている絵柄を見た人が「らしい」と思えばそれでよいというくらい, 描き方があいまいな場合が多い. 場所のデフォルメやプロポーションの不正確さについても, こと挙げしていれば切がない. これは広重の言う「写真」ということをどう考えるかにもつながるが, これについてはVIの注13を参照.
- (41) 『触留』25-2, 3月20日, 「麹町火消屋敷地震損所取り繕い修復小屋取立て」
- (42) 『触留』25-2, 4月10日, 「上野お宮修復, 護摩堂へ昨9日外迂宮相済み」
- (43) 前掲「広瀬六左衛門雑記抄」森前掲書 p. 176「両国川開」は第11冊に収められているが, 表紙に「戊午」とあり, 安政5年のものであることが分かる. 加えて同じ第11冊中に4月5日の「米人相撲見物」があることから川開が行なわれた「当5月28日」を安政5年の5月と確定できる. 『武江』では, 見物したのは蘭人だとしている(『武江』2 p. 165)が, 『日記』では「亜人, 蘭人」としている.(森前掲書 p. 71)
- (44) 同時代人の評を載せておく. 「広重の絵」の題がある. 「此節出版の中」として『江戸百』のいくつかの絵を批評しているが, そのうち木曾山の雪景=「木曾路之山川」の改印は8月なのでそれ以降に記したことが分かる. 「市井の絵草子店にある画山水広重は二十年来流行して, 天下の山川勝地大概出版せり. 江府名所の類に於ては, 大小其外幾通も是あり. □ていさゝかづつ景色の趣向を変じ, 画才をあらはす故, 中には面白もあれども, 又あまりくだくだしきも見ゆ. 此節出版の中, 堀切花菖蒲, 亀井戸藤などは好し. 高縄の車, 千駄木花屋敷, 滝の川桐島, 吉原の景の如きは, くだくだしくて見るに堪えず. 其外平望の景にては別趣なき故, 新意を出してかきたる両国相撲楼, 駒形堂の如き, 屋上楼阁山上より見下したるをかけるは余りなる強事, 可笑々々. 継絵の鳴戸. 木曾山の雪景はよく出来たり」前掲「広瀬六左衛門雑記抄」(p. 151). IIIの注9でとり上げた批評と違い, ここでは「阿波鳴門之風景」「木曾路之山川」を高く評価している. この同時代人にとって『江戸百』は, あくまで名所絵だったことも分かる.

## VI

- (1) 歌舞伎の予祝劇, 「暫」を絵にしたもので, 鎌倉権五郎景政と鹿島入道震斎(なまず)のからみが描かれている. 舞台は鹿島神社. 「(困り)ます」の字を, 市川團十郎の家紋, 三升(ます)で洒落ている. 添えられた

文章も花道でのつらねのもじり。

- (2) 「なるの日並」(『日本随筆大成』2-24 吉川弘文館 1974 年) p. 388-389
- (3) 『安政風聞集』。本願寺ほどの巨大な建築物になれば、江戸の多くの場所から目にすることができた。『江戸百』の「霞かせき」, 「芝愛宕山」, 「金杉橋芝浦」にも本願寺の伽藍が遠景に描かれているが、実際には江戸の空に聳えていない。
- (4) 『武江』 p. 191
- (5) 小林文次「江戸本所羅漢寺さざえ堂」(季刊『江戸っ子』1978 年 1 月 17 号)
- (6) 『市史稿』市街編第 44 p. 769, 『市史稿』遊園編第 5 p. 443
- (7) 高名な会席も、名所あるいは名高い場所のひとつであり、金波楼(玉庄)については、広重自身かつて『江戸高名会席尽』という連作を手がけている。しかし、地震後の火災で焼失した。(図 11 を参照)
- (8) この絵より 2 年後の安政 6 年初冬に出された江戸の料理屋の番付を見ると、「今戸有明楼」は、前頭の筆頭に挙げられているほど有名な店になっている。明治になると、この有明楼は、小林清親などに盛んに描かれることになる。この店は、「堀の芸者」時代、白博多のお菊と呼ばれていた、歌舞伎俳優「(昔の) 助高屋高助(後の沢村宗十郎)の女房」が、安政 3 年に建てた(岸井良衛『女芸者の時代』青蛙房 1974 年 p. 178)。したがって、右袂をとっていても不思議ではない。
- (9) 「山谷堀」の芸者は「堀」の芸者として東都に名高かった。安政 4 年には、四代続く名跡の「堀の小万」が有名だった(吉村武夫『大江戸趣味風流名物くらべ下』西田書店 1976 年 p. 102 以下)。絵に描きとめられている、「洗い髪につぶし島田を結びびん櫛の目画がいつも美しく、おくれ毛が一本もないことを自慢にし、その俠名は江戸内外にまで広がった」。
- (10) こういう比喩を多用するということは、単なる実験ということに留まらず、ある約束事を共有している人たちを第一に相手にしていることを意味する。その第一に相手にしている人たちとは、その場所を熟知している江戸の人間たちであった。したがって、名所絵=江戸みやげという図式は、この『江戸百』に関しては必ずしもあてはまらない。これは、前述の「余興」と同じ考え方である。たしかに、藩元の人たちにとっても、地震後の江戸の今を伝えるこの連作は関心の対象でありえたらう。しかし、「深川万年橋」の絵などは、江戸に一度も行ったことのない人にとっては、デザインの意外性だけが興味をつなぐ唯一の糸だったはずである。これは、時代が遠くはなれた現代人にも言える。
- (11) 市古夏生・鈴木健一編『新訂江戸名所花暦』ちくま文庫 2001 年 p. 124
- (12) これらのアイコンでなにを暗示しようとしているかの遊びが、この時代の国芳らの絵に横溢していることについては、前掲高田衛「鯰絵の作者たち」を参照。「またたかされる京町の猫」という川柳からも、ねこは遊女であると言える。
- (13) 「真を写す」あるいは「写真」という広重の言葉について、注記しておく。『土産』の四編(嘉永 3 (1850) 年)の序に「写真を旨として」「今日の前に視るとき、景勢を写せんと思ふ」という言葉が、また、『富士見百図』(安政 5 年)の序文に、北斎の描き方について、「絵組のおもしろきを専らとし、不二はそのあしらいにいたるもの多し」と批評し、それに対して自分の「まのあたりに眺望せしを其儘にうつし置たる艸稿を清書せしのみ——図取は全く写真の風景にて」と述べていることが紹介されている。ここから、広重が実景を描いているという思い込みが生まれてくるのだが、その原因は、現代人が、当時の「写真」という表現を、カメラ写真のような「写実」という意味として誤解してしまうからである。しかし、この表現は、カメラが日本に入る以前のものであり、そうした、いわば自然主義の思想は江戸時代には育っていない。川上冬崖が幕府の蕃書調所で西洋画法を公然と研究し始めるのは、安政 4 年になってからである。

広重のこの言葉は、自分が描く風景が、絵を視た人の頭の中にその場所の風景が生き生きと思い浮かべられるようにしたいという意気込みと読みとるべきである。言い換えれば、絵を視た人が確かにその場所だと思えるような絵を描く、そのために、比喩などを使ってみんなの風景に仕上げる努力をするということである。その絵を視た人が、総体としていかにその場所に行ってその「景勢」を目の当たりにするようだと思えば絵

として上出来だということである。

- (14) 広重の辞世に「などころ」があるからと言って「名所」を歌枕の「などころ」と解釈するわけにはいかないことは、これまでの行論で明らかだろう。ちなみに、辞世の句は「東路に筆を残して旅の空 西の御国の名ところを見舞」である。
- (15) 川喜田は『発想法』（中公文庫 1984 年）において、パースのアブダクションを「発想法」と訳した。演繹、帰納に続く第 3 の推論形式で三段論法で言う大前提と結論から中間の小前提を導くというものである。日本では訳語がまだ定着していない。ちなみに、伊藤邦武編訳『連続性の哲学』（岩波文庫 2001 年）で「仮説形成」と訳されている *retroduction* は、表現に悩んでいたパースが一時期採用していたもので *abduction* と同義である。アブダクションについては“Abduction is the process of forming an explanatory hypothesis. It is the only logical operation which introduces any new idea; for induction does nothing but determine a value and deduction merely evolves the necessary consequences of a pure hypothesis”, Charles Sanders Peirce, “Pragmatism as a Principle and Method of Right Thinking: The 1903 Harvard Lectures on Pragmatism”, SUNY, 1997, p. 230 を参照のこと。つまり、ここでパースは、発想法が、ある説明の仕方、つまり仮説（新しい考え）を形成するプロセスだと言っている。演繹法は価値の決定しかできず、帰納法では仮説を実際にテストして確かめるだけだとも述べている。これに続くパースの文章は示唆に富んでいる。つまり、発想法は *may be* で演繹法は *must be* で帰納法は *actually is* だという。邦文の文献は、上山春平「アブダクションの理論」（『人文学報』京都大学人文科学研究所 45 号 1978 年）くらいしかない。

発想法（アブダクション）の推理は演繹とも帰納とも異なるのでそのプロセスを明示する。

大前提 絵はすべて『江戸百』の絵である

小前提 『江戸百』のすべての絵には出来事が隠れている

結論 この絵には出来事が隠れている

すなわち「絵には出来事が隠れている」というひとつの結果（表われ）から「『江戸百』のすべての絵に出来事が隠れている」を導き出そうという推論法である。これが、三段論法で言う結論と大前提から中間の小前提を導くという形式で、結論から遡るという意味で一時期パースが *retroduction* という耳慣れない表現を用いていたのは、上に書いた通り。「浅草金龍山」に五重塔の九輪の修復という出来事が隠れていたことを発見したことから「発想」した手順はこのようなものであった。結論（表われ）が人間の思考がもたらしたものであるとするパースのプラグマティズムの特徴がよく分かる推論形式である。“If you carefully consider the question of pragmatism you will see that it is nothing else than the question of the logic of abduction”（前掲書 p. 249）とパースは注意を促している。出来事を復興のメッセージと考えたのも同じ推論形式である。上記の特徴でも書いたように、*may be*、つまり「かもしれない」ということが重要である。「出来事が隠れているのではないかと考える」理由を確実なものにするには、帰納法によるしかない。確率を持ち出すのはこのような理由からである。ちなみに実証例は 115 点中 45 点の 3 割 9 分である。つまり、『江戸百』の 4 割近い絵に「出来事が隠れている」ことが確認されたということである。ここで点数を 115 点としたのは「上野山した」、「市ヶ谷八幡」「ひくにはし雪中」を、二代広重作としてカウントしていないためである。

もうひとつは、発想した事柄を、帰納法を使って証明しようとしている時間的な照応性をどう考えるかという問題がある。別言すれば、出来事の 1, 2 カ月後に絵が描かれているという解釈についての問題である。

- (16) パースの記号論の優れた解説書に次の 2 冊がある：John K. Sheriff, “The Fate of Meaning”, Princeton, 1989, “Charles Peirce’s Guess at the Riddle”, Indiana, 1994. 本稿で、描かれた絵柄をわざわざアイコンと表現しているのは、パースの記号論にあるアイコン—インデックス—シンボルを念頭に置いたものである。

北原（事業推進担当者）

原信田（COE 共同研究員）



外題	改印	被害状況	
1 日本橋雪晴	安政3年5月	西河岸町日本橋南方より左右御堀端迄、通四丁目迄潰家42軒、潰土蔵7ヶ所	
2 霞かせき	安政4年1月	霞ヶ関黒田家上屋敷長屋崩れ、浅野家上屋敷破損	
3 山下町日比谷外さくら田	安政4年12月	鍋島屋敷全焼	
4 永代橋 佃しま	安政4年2月		
5 両ごく回向院元柳橋	安政4年閏5月	柳原郡代屋敷に隣接の馬喰町橋本町紺屋町辺大破損崩所多い	
6 馬喰町 初音の馬場	安政4年9月		
7 大てんま町木綿店	安政5年4月	大伝馬町痛みなし、但し土蔵の壁落ちる	
8 するがてふ	安政3年9月	駿河町、室町より十軒店今川橋迄大破損有	
9 筋違内八ッ小路	安政4年11月	筋違御門、石垣はみ出す、門外半潰破損多い	
10 神田明神曙之景	安政4年9月	神田明神社無事	
11 上野清水堂不忍ノ池	安政3年4月	清水堂無事、弁天堂境内の田楽茶屋惣潰、地震後撤去、石橋落下	
12 上野山した	安政5年10月	二代広重作	
13 下谷広小路	安政3年9月	下谷広小路、三橋より南全域、山下松坂屋まで焼失	焼失図参照
14 日暮里・寺院の林泉	安政4年2月		
15 日暮里諏訪の台	安政3年5月		
16 千駄木団子坂花屋敷	安政3年5月	紫泉亭の茶亭崩落	
17 飛鳥山北の眺望	安政3年5月		
18 王子稲荷の社	安政4年9月		
19 王子音無川堰球世俗大滝ト唱	安政4年2月		
20 川口のわたり善光寺	安政4年2月		
21 芝愛宕山	安政4年8月		
22 広尾ふる川	安政3年7月		
23 目黒千代が池	安政3年7月		
24 目黒新富士	安政4年4月		
25 目黒元不二	安政4年4月		
26 八景坂鎧掛松	安政3年5月		
27 蒲田の梅園	安政4年2月		
28 品川御殿やま	安政3年4月		
29 砂むら元八まん	安政3年4月	元八幡小名木川筋迄の内崩れ家多い	
30 亀戸梅屋舗	安政4年11月	亀戸梅屋敷(清光庵)潰	
31 吾嬬の森連理の樟	安政3年7月		
32 柳しま	安政4年4月	柳島妙見堂小破、橋本潰れ十間川へ落ち死者2人出ず。社表通り大壊れ	
33 四ツ木用水引ふね	安政4年2月	秋葉権現社無事、別当満願寺潰る、引舟川小梅瓦丁村方とも損じ	
34 真乳山山谷堀夜景	安政4年8月	山谷堀北側玉屋(金波楼)潰れ焼失、隅田土手割れ・液状化現象、三	焼失図参照掘土手下鳥居損
35 隅田川水神の森真崎	安政3年8月	水神・森大破、木母寺梅若塚大破周辺の茶屋潰。但し植半無事	
36 真崎辺より水神の森内川関屋の	安政4年8月	真崎稲荷社無事、川口の柳屋無事里を見る図	
37 墨田河橋場の渡かわら滝	安政4年4月	橋場今戸周辺、大破崩れ多い	
38 廓中東雲	安政4年4月	吉原から猿若町、花川戸町山之宿町にかけて焼失、但し河岸側残	
39 吾妻橋金竜山遠望	安政4年8月	吉原から猿若町、花川戸町山之宿町にかけて焼失、但し河岸側残	
40 せき口上水端はせを庵椿やま	安政4年4月	関口辺崩れ多し	
41 市ヶ谷八幡	安政5年10月	市ヶ谷八幡周辺大破、八幡は無事、尾張屋敷相当の被害	二代広重作
42 玉川堤の花	安政3年2月	内藤新宿無別条	
43 日本橋江戸ばし	安政4年12月	江戸橋周辺から小網町の河岸倉の壁悉く落ちる	
44 日本橋通一丁目略図	安政5年8月	通一丁目白木屋表土蔵無別条裏土蔵不残震	
45 八つ見のはし	安政3年8月	一石橋石垣少々崩れ、細川越中守、住居破損長屋大破土蔵其外潰れ、夏目左近破損	
46 鎧の渡し小網町	安政4年10月	江戸橋周辺から小網町の河岸倉の壁悉く落ちる	
47 昌平橋聖堂神田川	安政4年9月	湯島聖堂無別条、昌平橋小破、学問所大破	
48 水道橋駿河台	安政4年閏5月	水道橋向こうの武家屋敷(小川町)焼失	
49 王子不動の滝	安政4年9月		
50 角筈熊野十二社俗称十二そう	安政4年7月		
51 靴町一丁目山王祭ねり込	安政3年7月	半蔵御門渡櫓其外共大破	
52 赤坂桐畑	安政3年4月	桐畑対岸の山王社無事境内破損、門前崩所有、伝馬丁田町通り一ッ木辺崩れ多い	
53 増上寺塔婆羽根	安政4年1月	増上寺損所若く、有馬候北長屋百間有余揺崩れ	
54 外桜田弁慶堀靴町	安政3年5月	井伊上屋敷外塀長屋破損、屋敷前半蔵門迄石垣御堀へ崩落ち	
55 佃しま住吉の祭	安政4年7月		
56 深川万年橋	安政4年11月		
57 みつまたわかれの淵	安政4年2月	大橋手前稲荷堀辺、田安殿、林肥後守、安藤長門守(寺社奉行)等屋敷大破	
58 大はしあたけの夕立	安政4年9月	安宅鞆蔵御普請、新大橋向六間堀町辺の武家屋敷焼失	
59 両国橋大川ばた	安政3年8月	多田葉師辺より両国橋大川通屋敷大破、土蔵残る所なし	
60 浅草川大川端宮戸川	安政4年7月	多田葉師辺より両国橋大川通屋敷大破、土蔵残る所なし	
61 浅草川首尾の松御鹿河岸	安政3年8月	浅草御蔵大破	
62 駒形堂吾嬬橋	安政4年1月	駒形堂傾く、南方の浅草駒形町・諏訪町・黒船町・御鹿河岸まで焼失	
63 綾瀬川鐘か淵	安政4年7月		
64 堀切の花菖蒲	安政4年閏5月		
65 亀戸天神境内	安政3年7月	亀戸天神社無事、境内大破損、反橋無事、門前町焼失	
66 五百羅漢さざの堂	安政4年8月	さざの堂大破、羅漢堂潰れ	
67 逆井のわたし	安政4年2月	亀有逆井辺液状化現象、新宿の旅館で死者	
68 深川八まん山ひらき	安政4年8月		
69 深川三十三間堂	安政4年8月	三十三間堂大破(中程より先の方、十間が倒れ)、庭の空き地に仮殿を「補理」して「御神像」を安置	
70 中川口	安政4年2月	中川口御番所周辺大崩れ	
71 利根川ばらばらまつ	安政3年8月		
72 はねたの渡し弁天の社	安政5年8月		
73 市中繁栄七夕祭	安政4年7月	中橋より南伝馬町、京橋、比丘尼橋辺焼失	焼失図参照
74 大伝馬町 こぶく店	安政5年7月		
75 神田紺屋町	安政4年11月	中橋より南伝馬町、京橋、比丘尼橋辺焼失	
76 京橋竹がし	安政4年12月		
77 鉄炮洲稲荷橋湊神社	安政4年2月	八丁堀南八丁堀両河岸通り破損	
78 鉄炮洲築地門跡	安政5年7月	八丁堀南八丁堀両河岸通り破損	
79 芝神明増上寺	安政5年7月		
80 金杉橋芝浦	安政5年7月		
81 高輪うしまち	安政4年4月	牛町高輪北町南町大破損、第二台場潰れ焼失、第六台場大被害	
82 月の岬	安政4年8月	高輪通り北品川大破損	
83 品川すきき	安政3年4月	高輪通り北品川大破損	
84 目黒爺々が茶屋	安政4年4月		
85 紀の国坂赤坂溜池遠望	安政4年9月	赤坂紀伊徳川上屋敷内部破損あり、但外部からはわからず安泰という報告も	
86 四ツ谷内藤新宿	安政4年11月	内藤新宿無別条	



87	井の頭の池弁天の社	安政3年4月	
88	王子滝の川	安政3年4月	
89	上野山内月のまつ	安政4年8月	不忍池弁天堂境内の田楽茶屋惣潰、石橋落下、松平大蔵大輔・松平豊之丞大破
90	猿わか町よるの景	安政3年9月	吉原から猿若町、花川戸町山之宿町にかけて焼失、但し河岸側残
91	請地秋葉の境内	安政4年8月	秋葉権現社無事、別当満願寺潰る、引舟川小梅瓦丁村方とも損じ
92	木母寺内川御前裁畑	安政4年12月	神ノ森大破、木母寺梅若塚大破周辺の茶屋潰。但し植半無事
93	にい宿のわたし	安政4年2月	亀有逆井辺液状化現象、新宿の旅館で死者、中川口御番所周辺大崩れ
94	真間の紅葉手古那の社継はし	安政4年1月	
95	鴻の台とぬ川風景	安政3年5月	
96	堀江ねこぎね	安政3年2月	
97	小奈木川五本まつ	安政3年7月	土井大炊頭屋敷焼け、夫より小名木川辺大いに損じ、九鬼式部長屋二棟潰其外大破
98	両国花火	安政5年8月	
99	浅草金龍山	安政3年7月	九輪被害
100	よし原日本堤	安政4年4月	日本堤数ヶ所割れ
101	浅草田甫西の町詣	安政4年11月	驚大明神本社破損、僧坊碑等大破損、此辺小屋敷町家共大に崩
102	蓑輪金杉三河しま	安政4年閏5月	金杉(三河島)三輪町金杉町辺潰れ多い
103	千住の大はし	安政3年2月	千住宿大半壊れ
104	小梅堤	安政4年2月	秋葉権現社無事、別当満願寺潰る、引舟川小梅瓦丁村方とも損じ
105	御鹿河岸	安政4年12月	多田薬師辺より両国橋大川通屋敷大破、土蔵残る所なし
106	深川木場	安政3年8月	木場、洲崎十万坪周辺の武家町家崩潰家多く
107	深川洲崎十万坪	安政4年閏5月	木場、洲崎十万坪周辺の武家町家崩潰家多く
108	芝うらの風景	安政3年2月	芝浦御浜御殿石垣崩れ、所々破損
109	南品川鯉洲海岸	安政4年2月	
110	千東の池袈裟懸松	安政3年2月	
111	目黒太鼓橋夕日の岡	安政4年4月	
112	愛宕下敷小路	安政4年12月	愛宕下敷小路辺諸候上中下屋敷破損多い
113	虎の門外あふひ坂	安政4年11月	虎御門外葵坂溜池櫻坂上大破損、京極邸練塀五十間倒、長屋大破、石垣樋損壊
114	ひくにはし雪中	安政5年10月	中橋より南伝馬町、京橋、比丘尼橋辺焼失 二代広重作
115	高田の馬場	安政4年2月	高田の馬場穴八幡無事
116	高田姿見のはし梯の橋砂利場	安政4年1月	
117	湯しま天神 坂上眺望	安政3年4月	湯島天神表石垣崩れ社前損ス。奥山茶見世講積場不残潰れ
118	王子装束糸の木大晦日の狐火	安政4年9月	
119	赤坂桐畑雨中夕けい	安政6年4月	
A	名所江戸百景目録	安政5年10月以後	

\*被害状況は、『別本藤岡屋日記』『江戸大地震』、『武江地動之記』、『安政見聞誌』などを基に作成した

表2 出来事と絵の一覧

出来事	史料	年月または改印	作品
安政江戸地震		安政2年 10月2日	
お成り、浜御庭へ道筋 内藤新宿桜樹一件	触留 25-1 藤岡屋日記	安政3年 2月2日 2月13日 2月改印 2月改印 2月改印 2月改印 2月改印	堀江猫ざね (96) (東) 玉川堤の花 (42) (西) (絵5) 千束の池袈裟懸松 (110) (南) 千住の大はし (103) (北) 芝うらの風景 (108) (絵4)
お成り、道灌山、千駄木植木屋 板橋筋へのお成り 麴町火消屋敷修復 山王祭例年通り挙行のお達し 御殿山台場掘付筒、玉込め稽古 上野お宮修復	触留 25-2 触留 25-2 触留 25-2 触留 25-2 触留 25-2 触留 25-2	3月3日 3月13日 3月20日 4月5日 4月9日 4月10日 4月改印 4月改印 5月改印 5月改印 5月改印 5月改印 5月改印	品川御殿やま (28) 上野清水堂不忍ノ池 (11) 日暮里諏訪の台 (15) 千駄木団子坂花屋敷 (16) 飛鳥山北の眺望 (17) 外桜田弁慶堀糞町 (54) 王子瀧の川 (88)
浅草寺五重塔九輪修復 森田座再興、新舞台 山王祭挙行	武江年表 藤岡屋日記 武江年表など	5月 5月15日 6月15日 7月改印 7月改印	浅草金龍山 (99) (絵2) 糞町一丁目山王祭ねり込 (51)
大風水、築地本願寺伽藍倒壊 松坂屋営業再開	安政風水録 永代記録帳	8月25日 9月29日 9月改印 9月改印	猿わか町よるの景 (90) (絵10) 下谷広小路 (13) (絵7)
増上寺御霊屋完成引き渡し	柳營日次など	12月22日 安政4年 1月改印	増上寺塔赤羽根 (53) (絵8)
王子筋へのお成り	藤岡屋日記	1月21日 1月改印 2月改印 2月改印	高田姿見のはし梯の橋砂利場 (116) 王子音無川堰埭世俗大滝ト唱 (19) (絵6) 高田の馬場 (115)
目黒滝泉寺不動尊の開帳 亀有筋へのお成り 常州大宝八幡宮出開帳 (於、深川永代寺) 出開帳に伴う勸進相撲 (於、回向院) 仮宅「二組の心中」事件	藤岡屋日記 藤岡屋日記 藤岡屋日記 藤岡屋日記 武江年表など	2月28日より 3月11日 4月朔日 4月 4月19日 4月改印 4月改印 4月改印 4月改印 4月改印 4月改印	目黒新富士 (24) 目黒元富士 (25) 目黒爺々が茶屋 (84) 目黒太鼓橋夕日の岡 (111) 廓中東雲 (38) (絵11)
端午の節句		5月5日 閏5月改印 閏5月改印 閏5月改印	堀切の花菖蒲 (64) 両ごく回向院元柳橋 (5) 水道橋駿河台 (48)
吉原の「引移り」 大山石尊山開き 住吉祭挙行 七夕祭 大山参り帰り、喧嘩一件 神田明神の祭礼「町触」	藤田屋日記 御社用日記 藤岡屋日記 藤岡屋日記	6月25日～28日 6月27日 6月28日 7月7日 7月18日 7月20日 7月改印 7月改印 7月改印	市中繁栄七夕祭 (73) (絵16) 浅草川大川端宮戸川 (60) (絵13) 佃しま住吉の祭 (55) (絵14)
御船蔵修復完成	東京市史稿市街篇	8月 8月改印 8月改印 8月改印 8月改印	吾妻橋金竜山遠望 (39) 五百羅漢さざる堂 (66), イメージ 深川八まん山ひらき (68) 深川三十三間堂 (69), イメージ (絵21)
中野筋へのお成り	藤岡屋日記	9月5日 9月改印 9月改印	大はしあたけの夕立 (58) (絵9) 神田明神曙之景 (10)
手拭さらし干し 酉の町 亀有筋へのお成り	10月ごろから 藤岡屋日記	11月 11月19日 11月改印 11月改印 11月改印 12月改印 安政5年	神田紺屋町 (75) 四ッ谷内藤新宿 (86) 浅草田圃西の町詣 (101) (絵12) 本母寺内川御前裁畑 (92)
両国川開 小室妙法寺出開帳 (於、浄心寺) お迎え	広瀬雑記抄 藤岡屋日記	5月28日 7月19日 7月改印 7月改印 7月改印 8月改印 9月6日	鉄炮洲築地門跡 (78), イメージ, 余興 (絵19) 芝神明増上寺 (79), 余興 (絵20) 金杉橋芝浦 (80) (絵15) 両国火花 (98) (絵17)
広重没		9月6日	

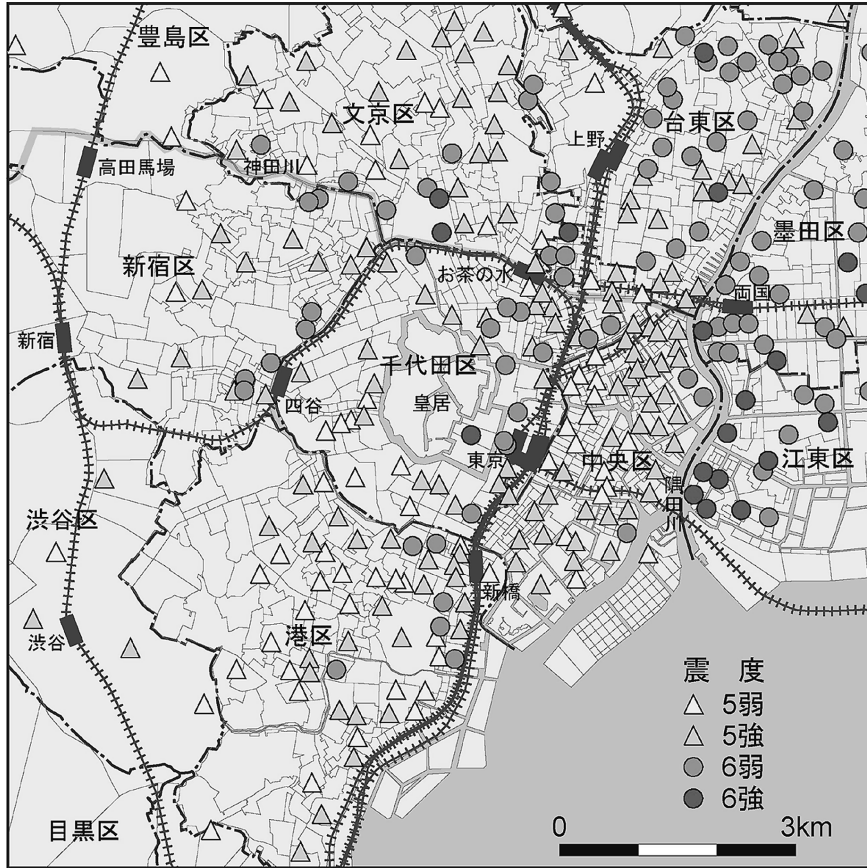


図1 「安政江戸地震の震度分布」(国立歴史民俗博物館編『ドキュメント災害史1703-2003』2003年 p. 44)

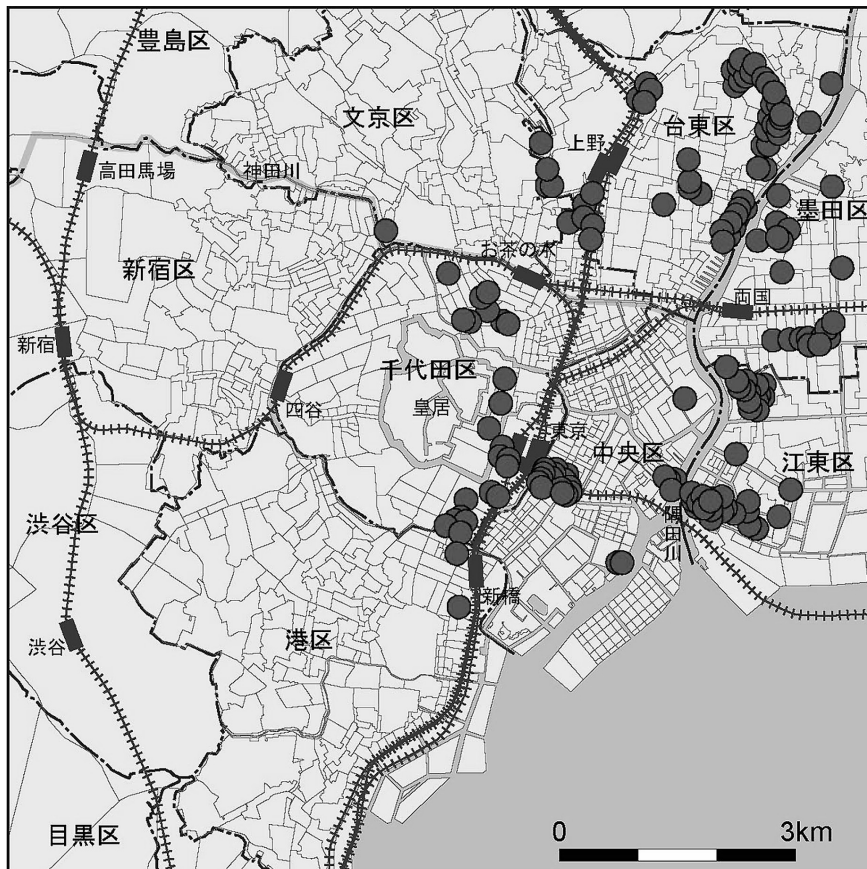


図2 「安政江戸地震の火災延焼」(同書 p. 45)

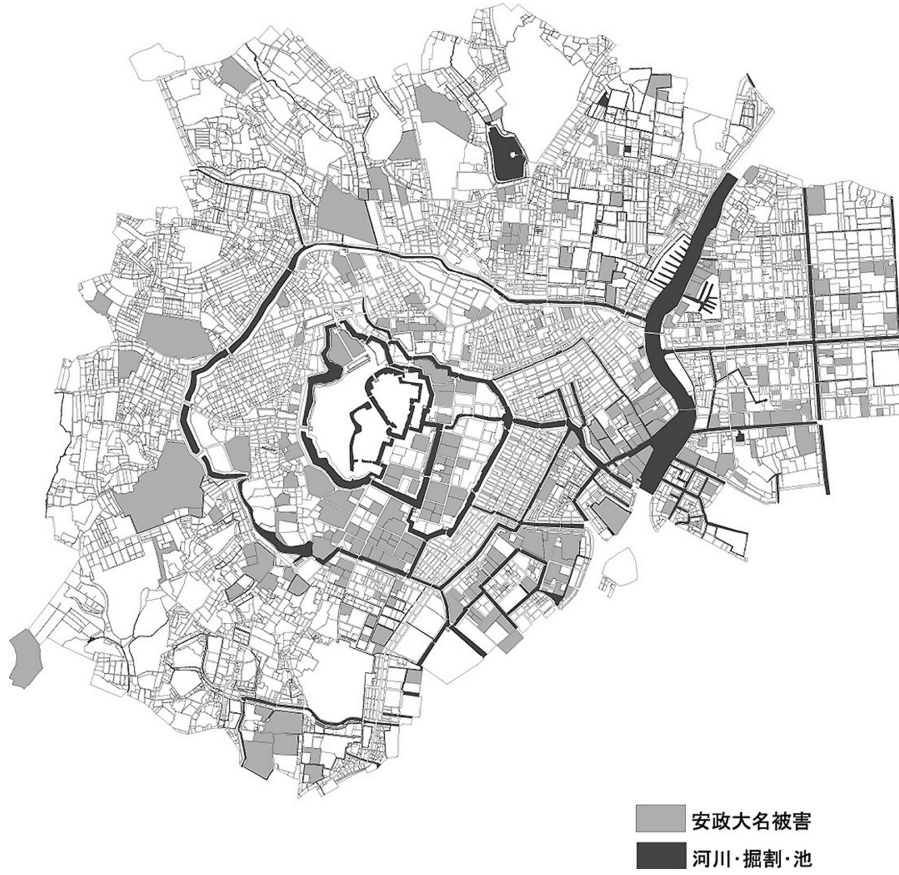


図3 「安政江戸地震の大名屋敷被害」

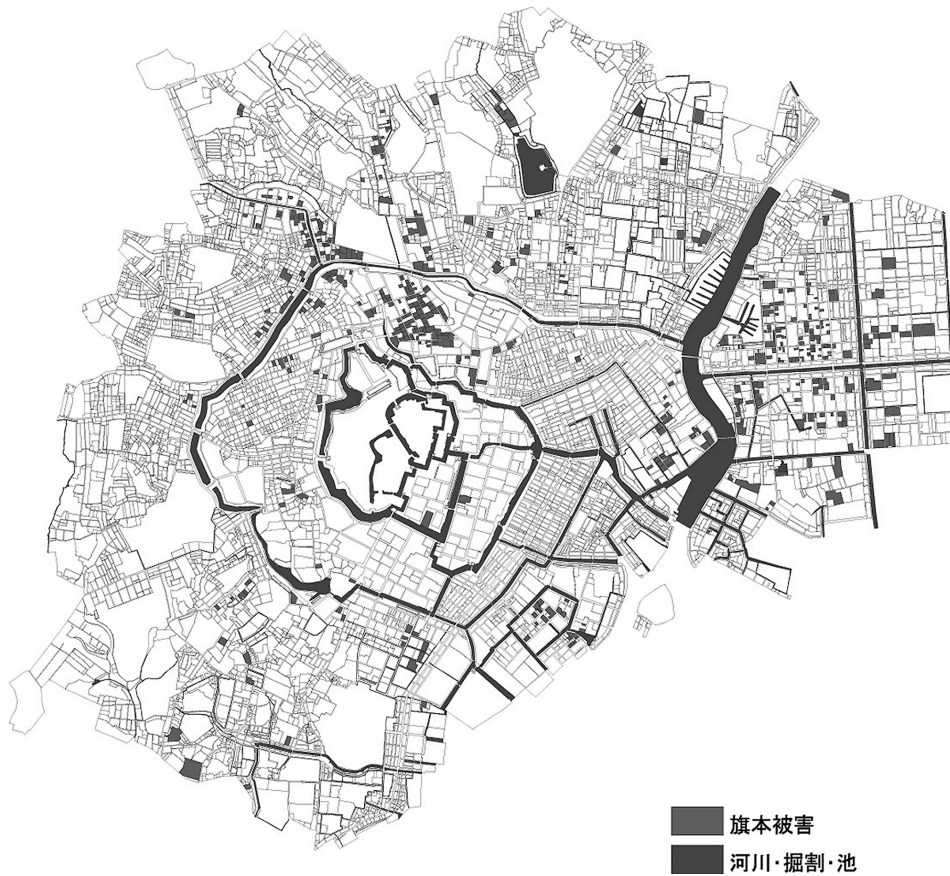


図4 「安政江戸地震の旗本御家人屋敷被害」



図5 「安政江戸地震で死者が出た町地」

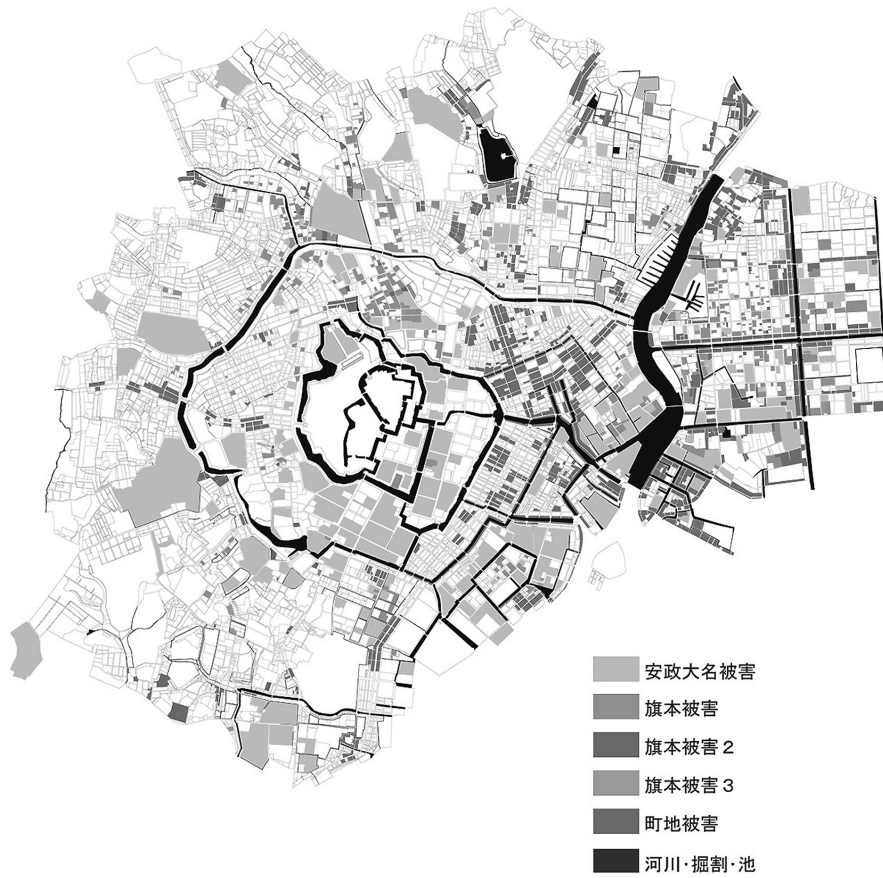


図6 「安政江戸地震の被害図」

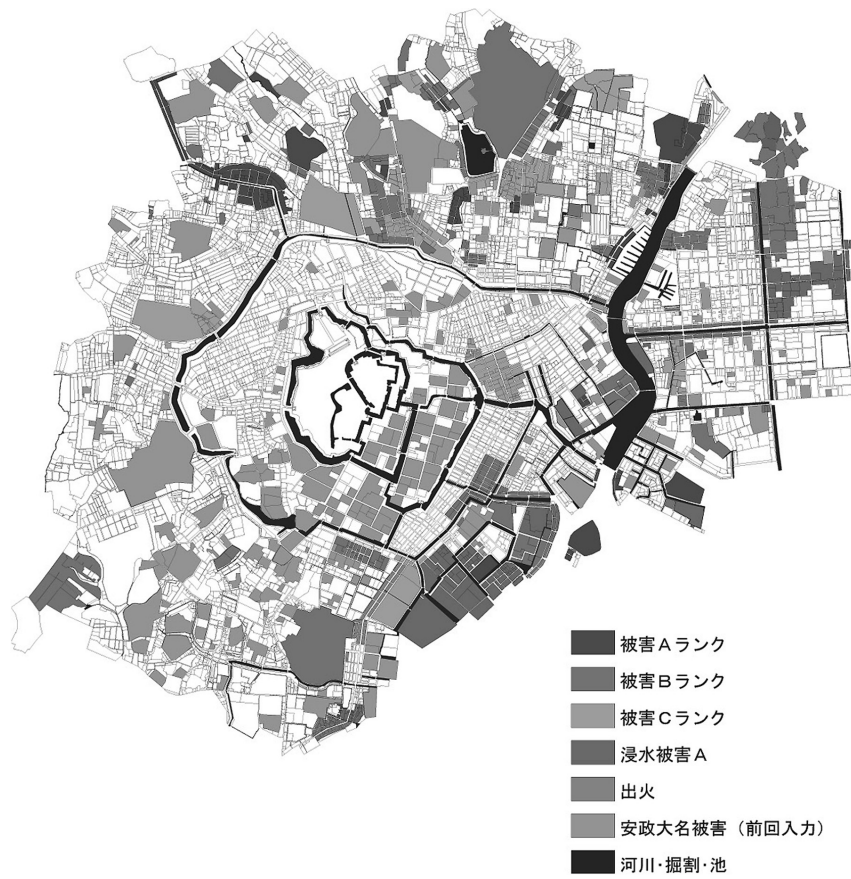


図7 「江戸における安政3年8月の台風被害」

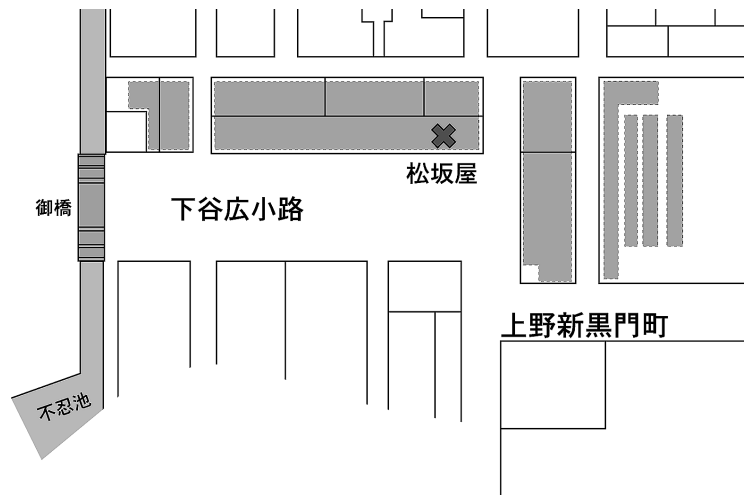


図8 「松坂屋を含む下谷広小路の焼失範囲」

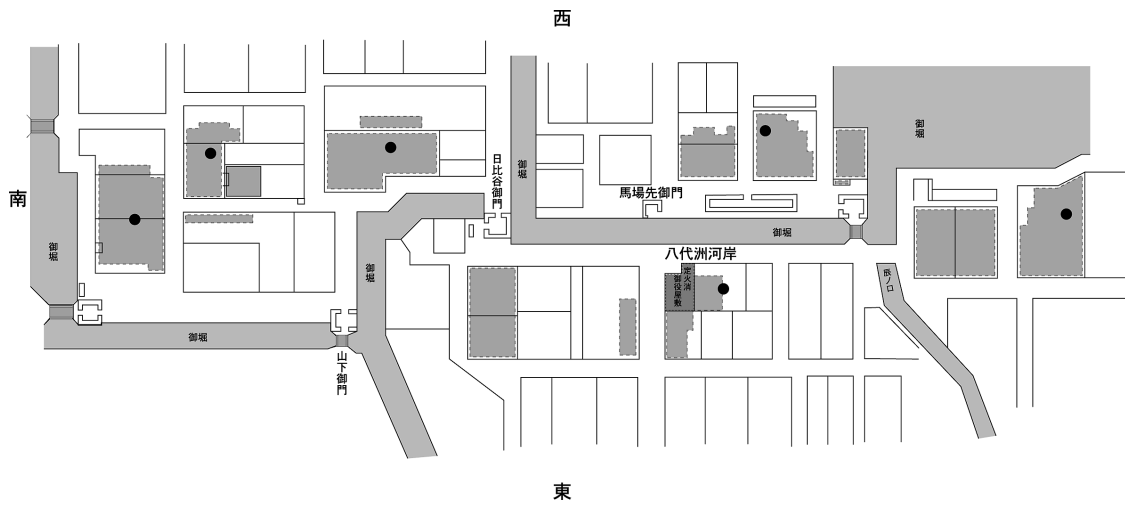


図9 「焼失した八代（重）洲河岸火消し屋敷」

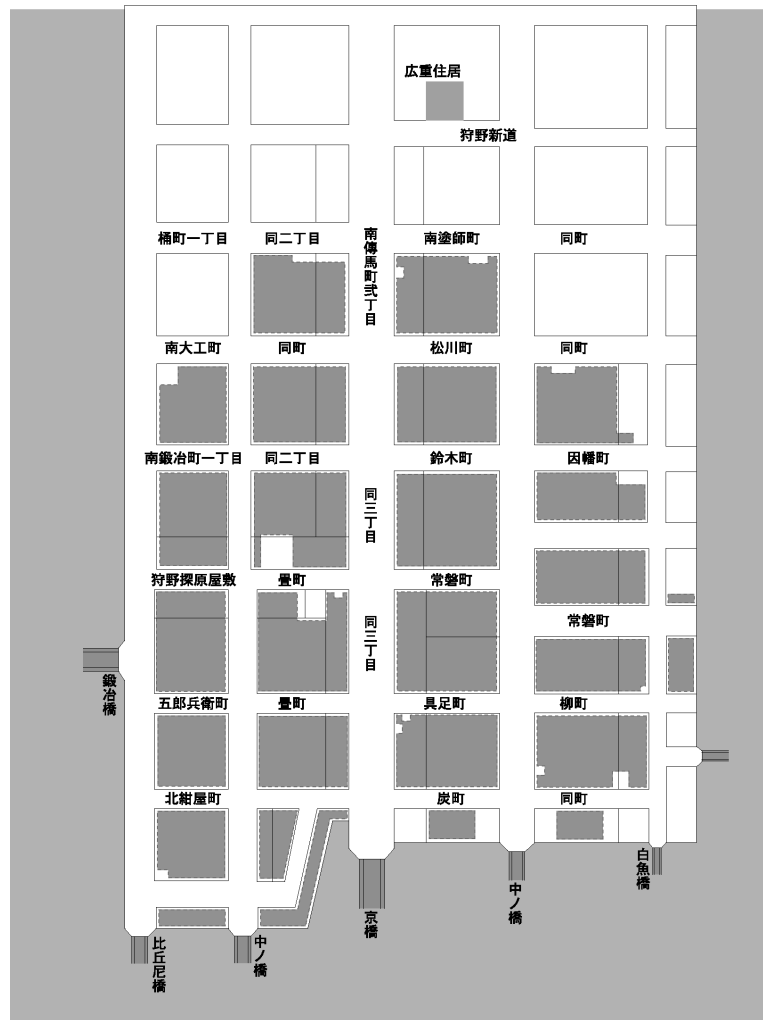


図10 「南傳馬町辺の焼失地域と広重住居」

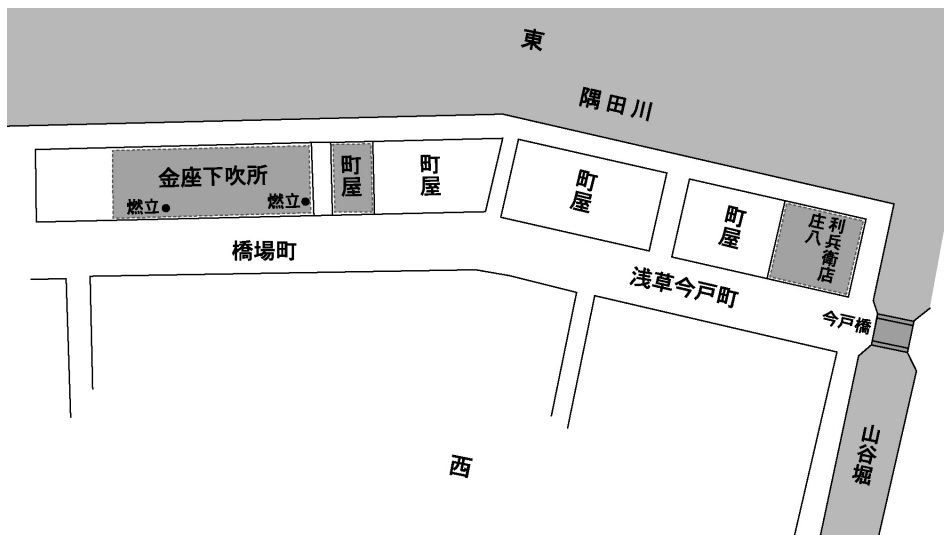


図 11 「焼失した今戸橋金波楼（利兵衛店庄八）」





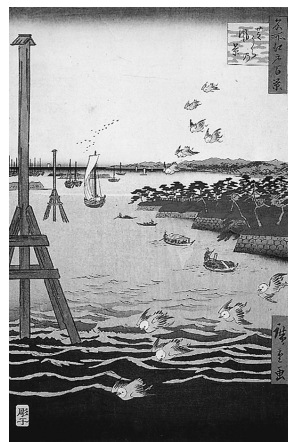
絵1 国貞「今様見立士農工商・商人」(江戸東京博物館所蔵) 3枚続



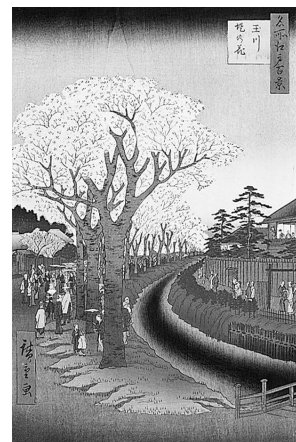
絵2 「浅草金龍山」  
(江戸東京博物館所蔵)



絵3 「浅草寺大塔解釈」  
(東京大学地震研究所所蔵)



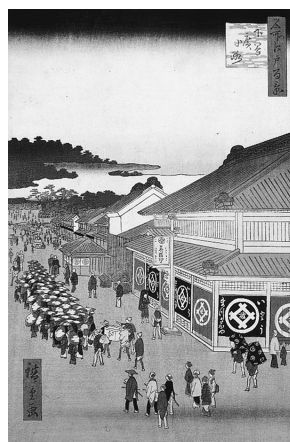
絵4 「芝うらの風景」  
(江戸東京博物館所蔵)



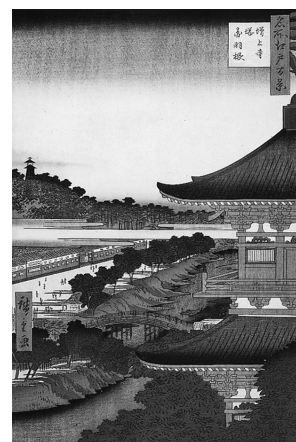
絵5 「玉川堤の花」  
(財団法人東洋文庫所蔵)



絵6 「王子音無川堰埭世俗  
大瀧卜唱」  
(江戸東京博物館所蔵)



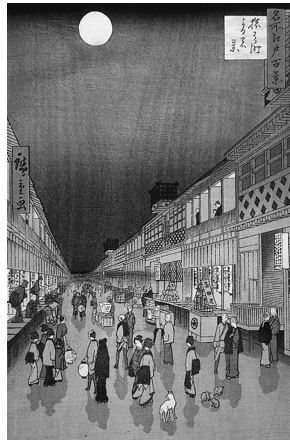
絵7 「下谷広小路」  
(江戸東京博物館所蔵)



絵8 「増上寺塔赤羽根」  
(江戸東京博物館所蔵)



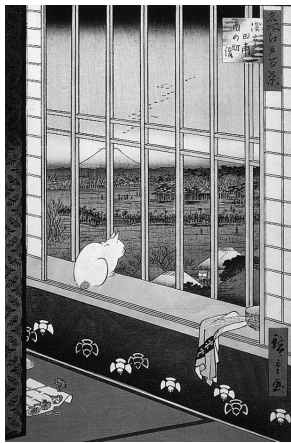
絵9 「大はしあたけの夕立」  
(財団法人東洋文庫所蔵)



絵10 「猿わか町よるの景」  
(江戸東京博物館所蔵)



絵11 「廓中東雲」  
(財団法人東洋文庫所蔵)



絵12 「浅草田圃西の町詣」  
(江戸東京博物館所蔵)



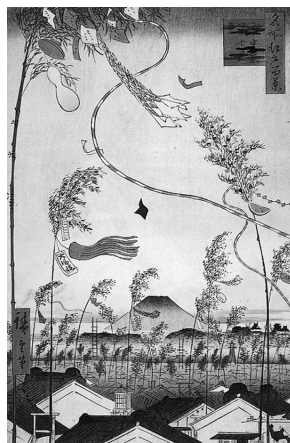
絵13 「浅草川大川端宮戸川」  
(江戸東京博物館所蔵)



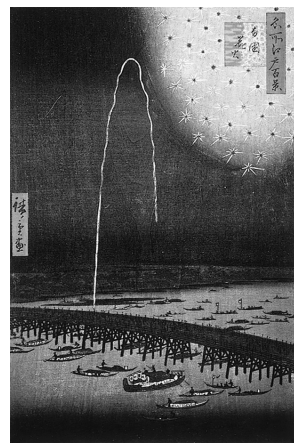
絵14 「佃しま住吉の祭」  
(江戸東京博物館所蔵)



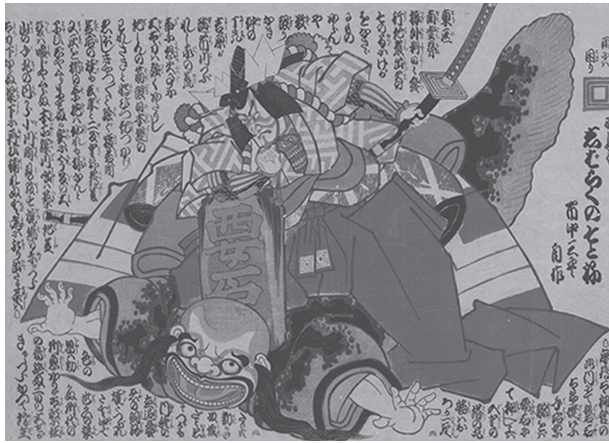
絵15 「金杉橋芝浦」  
(江戸東京博物館所蔵)



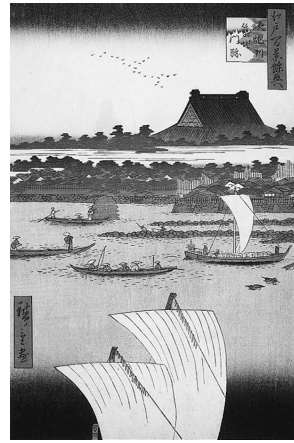
絵16 「市中繁栄七夕祭」  
(江戸東京博物館所蔵)



絵17 「両国花火」  
(江戸東京博物館所蔵)



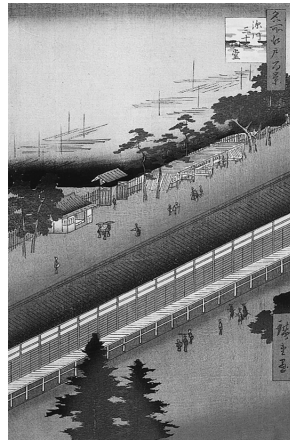
絵 18 「地震で困ります しばらくのそと寝」  
 (東京大学地震研究所蔵)



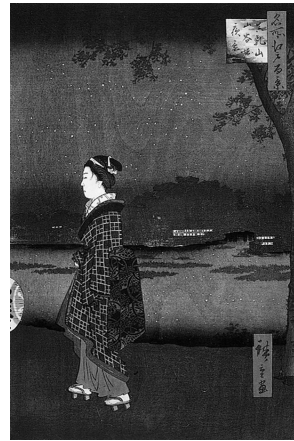
絵 19 「鉄炮洲築地門跡」  
 (江戸東京博物館蔵)



絵 20 「芝神明増上寺」  
 (江戸東京博物館蔵)



絵 21 「深川三十三間堂」  
 (江戸東京博物館蔵)



絵 22 「真乳山山谷堀夜景」  
 (江戸東京博物館蔵)